

川柳塔

昭和四十九年九月二十五日 印刷
昭和四十九年十月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五六九号



No. 569

49年度二賞発表

十月号



酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀

超特撰
一（化粧ケース入）
ハリツトル詰・一、八〇〇円



えらばれ
みがきぬかれた
灘の酒
超特撰 日本盛



あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚 焼 焼 餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉 焼 饅



大 阪・なんば



TEL (641) 0551~2



＜出張店＞ なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストア／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

へんな存在

台風が近づいていること、高潮を警戒すること等、テレビニュースがしきりに続いて居た八月中頃の或る朝であった。私が毎朝歩く海岸に生れだてと思われる小蟹と、雑魚の群れが、何百何千ともしれず波のゆれに身をまかせたようにただようて居た。毎年今頃になるとよく見られる光景であるが、こうした動物は多産なるが故に放置されるのかとも考えられるが、少くとも人間は自分が産んだ子どもに対しては何ものをも犠牲にして保護して

ゆくものと常識つけられて医学の上でも行政の面でも、受胎、出産、育児と一貫して人権尊重の対策が喧しく樹てられている現在である。作家の土岐雄三さんが大法輪に「父母未生以前のわれ、両親が生れる前におれなる者は一体ドコにいたのだろう。諸行無常と悟り切れはしないが、なにやら諸事むなしさを感じる」と書いている。そして人の一生とはへんなモンだと沁々思わざるを得ないと結んでいる。



(弓削駅紹介)

9月8日に開かれた路郎句碑建立25周年記念川柳大会の弓削は全国的に知られた川柳の町である。この町の玄関が弓削駅で、この正面に路郎句碑が建っている。

手本どうり書いて師匠の氣に入らず

言葉静かに満更でない太い眉

画竜点睛ちとすぎましたご挨拶

かさかしの言葉の裏に身をかわし

ひめごとの首尾整わぬまま疲れ

中島生々庵

川柳塔十月号

座右の句

一ト握り ああ人生は和に如かず

(路郎)

私の句

バラ開く 朝の心を失わず

小 浜 牧 人

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

へんな存在

中島生々庵

(1)

生むもの生れるもの

川村好郎

(2)

誹風柳多留廿五篇研究

(三)

(20)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選

(4)

水煙抄

川村好郎選

(30)

官製俳諧教導職

東野大八

(22)

49年度路郎賞・川柳塔賞発表

(24)

49年度二賞中間発表

(40)

秀句鑑賞

(同人吟)

西尾 菜

(36)

(水煙抄)

橘高薫風

(37)

鈴 虫

麻生葭乃

(39)

百人一首と川柳 (4)

富士野鞍馬

(38)

生むもの

生れるもの

川村好郎

花菱アチャコさんが亡くなった。

エンタツ、アチャコのコンビ漫才は私等の年齢のものには忘れられない楽しいものである。大阪千日前の法善寺横丁にあった紅梅亭、花月の寄席劇場に出演し漫才と云わず、表の看板には「二人漫談 エンタツ、アチャコ」と書いてあったように記憶している。「早慶戦」などは私は何度も聴きに行ったものでこの時分がアチャコの全盛時代で人氣も大したものであった。

ある時、このコンビが熱演し、いよいよ佳境に入り、なんでもエンタツがアチャコをやり込めて黙らしてしまい、あわやアチャコに突っ掛かってゆく所作をした時である。突然満員の客席から多分アチャコのファンであろう。「エンタツのアホー。アチャコ負けるななぐってやれ」と大声で叫んだ。二人の巧みな話術に魅せられたのであろう。その瞬間、アチャコは半分客席を半分エンタツを見なが

近作

諸家

(45)

一分間の柳論

二賞作家こんにちわ

きさ子・布堂・不朽・遠二・鬼遊・恵二朗・紫・

越智一水

(42)

代打要員の秀句鑑賞

久米雄・智子・緑之助・笑子・正朗・芳枝・牧人・芳子

不二田一三夫

(46)

第26回西日本川柳大会

島居百酒

(47)

秋窓二題

森田布堂

(45)

雅号ぶっちゃけばなし

竹内翁童

(63)

初歩教室

本田恵二朗

(50)

大萬川柳「嘘」

川村好郎選

(52)

柳界展望

(庸佑)

(54)

本社九月句会

各地柳壇(佳句地10選)

(56)

一路集

「選手」

(61)

「立ち読み」

野田素男選

(48)

「菊」

渡辺曉選

(48)

編集後記

吉田水車選

(49)

座右の句

(三夫・葉子)

(64)

私

君見たまへ蒔萩草が伸びてゐる

(路郎)

私の句

なすこともなく脈搏をみていたり

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

三宅不朽

ら

「あんたそら無茶苦茶でござりますがナ」と云ったので、座が白けるどころか一層湧いたものである。

晩年アチャコがテレビに映画に「無茶苦茶でござります」をせりふに入れ、アチャコの声帯模写をする人はこの言葉で真似るようになったが、おそらくこの時が台本に無い突然に出たアドリブで流石修練を積んだ芸のたまものであろう。

親や子を亡くした人、夫と死別し妻を失いし人の句は私たちの胸を打つ句が多い、経験しないものには詠めない切実な心から自ら生れてくるのであろう。この感じこの思いを如何に表現しようかと推敲し、探求しビタリと適確な言葉を見出し表現してこそ句も生き、読むものに感動を与えるものであろう。付焼刃であってはならない。真似ではない。生まねばならない。

私の好きな故花柳草太郎丈は「芸は生むもの、生れるもの。苦心のない芸は節のない竹のようなもので、枝葉は茂っても風味がない」と。

アチャコはこんな事を教えてくれた。



中島生々庵選

竹原市 三宅 不朽

胸を病む指と豆腐もしっており
子よ妻よ素直に菓飲んでます
付き出しのように菓が出るベッド
亡父の死がことさら胸を嘔む微熱
カンナの朱一期一会の彩で炎え

岡山県 浜田 久米雄

国会へ違反だらけが登院す
その先が見えているから念を押し
沈黙は別れ話となる気配
番組に合わせ風呂から上って来
家計簿の四桁は念を入れて書き

宝塚市 傍島 静馬

助産婦の亭主で丸い人ざわり
チビリチビリ拗ねてるとこへ女来る
風変わりホトケになって見直され
このへんにへそくりたしか入れたはず

起き抜けの服禁煙けなるがり

飲みすぎた音痴がマイク離さない

開発ヘタダで泳げるところが減り

インフレヘ孫の守りなどしておれず

くやしさが一人前にしてくれる

投出してたまるか後悔したくなし

入院して

生きるとは耐えること也闘病誌

小康の早や考える金のこと

軽患者ピエロの笑い撒き歩き

学会も霊友会も共に病み

老人の愚痴病院へ捨てられて

孫の死(二句)

死の顔よ童子神の子仏の子

香川県 岡田 拳法

倉敷市 稲田 豊作

出雲市 尼 緑之助

そのままが仏あわれを問いかける

長男大手術(二句)

返り血をあびて折返し点走る

山肌の緑世相にたじろかず

汽車弁のコスト算出するも旅

青森市 工藤 甲吉

火を熱をくぐった壺の静けさよ

やけくそになってウナ重などを食い

ねぶたばやし遠くに聞いて喪に服す

亡妻埋骨式(八月九日)

早よ土に還りなさいと骨埋める

もう一度新たな涙骨埋める

大阪市 正本 水客

白杵から南阿蘇へ

野仏の唱和につぎつぎ迎えられ

久住と阿蘇の水が城跡を孤高にす

石垣の鋭さ緑りを深くする

真夜中の湯滝の音とふたりいる

鳥の声に負けじと滝おと朝になる

倉敷市 野田 素身郎

せわしない世に贅沢な船の旅

航跡の如いくつかの恋が消え

出来ぬ子が日焼けを誇る夏休み

大ジョッキやおらネクタイを緩め

ここの一番になりベテランの味を出し

大阪市 本多 柳志

温情家過ぎて人事課には向かず

鯛を釣るえびまで時価で見積られ

ブルドーザーの重さに耐えている史蹟

傾聴に足る匿名の投書欄

全国区入れる自由をもて余し

大阪市 西出 一栄

ベッドで春すぎ座敷牢で夏を越し

新調を一度も着ずに夏すぎる

付添のあくび見つけた昼下り

病む程に寝巻の数がふえてゆき

心臓を押えて友の訃報を聞く

笠岡市 松本 忠三

本堂の提灯スイッチで灯り

盆行の法衣を包む蟬しぐれ

手を貸してくれた車掌の名札見る

盆踊り由来分らぬまま踊り

立替えておいたと女房他人めき

倉敷市 本田 恵二朗

雑草だ蟻だ庶民だ健康だ

性こりもなく化けくらべして女

順風満帆初心忘れてつつ走る

面影が振り向く送り火が消える

西瓜割り下手な座頭市である

大阪市 山川 阿茶

口紅を選びつつふと年思う
昼寝するつもりでとった夏やすみ
ひまわりが首をたれてる月曜日
椎茸の虫干しをする一人もの
自分のエアポケットに自分のはまる時

和歌山市 野村太茂津

暴発しそう手向花しおれてく怒り
いぶし銀磨けば仲間の詩が光る
踏み台を支える華奢な手にも汗
細腕の支え見つけた日の歓喜
頼られて素直でないのがお気に召し

呉市 槇田英詩

人間ドックで錆びた歯車診てもらい
化石にもなれず貝殻波に揺れ
宮仕え尾を振りながら生きている
コインロッカーに土産を預け飲み歩き
鯛なんて釣れる筈なし海老を喰べ

大阪市 吉田圭井堂

偶然も奇遇も嫉妬耳かさず
常識でつつんだお布施馬鹿にされ
伸び過ぎてずんべら棒の東京都
成田空港食道癌で寝たつきり
手形追う車がマヒに巻き込まれ

愚痴云うてみてもあかんと云うて愚痴

尼崎市 黒川紫香

住宅地聞く人もなく汗をかき
シャツ替えて次の峠をまた目指し
奥びわ湖を探る
船捨てて賑やかになる婦人客(海津大峠)
賤ヶ岳北と南の風揺れる

愛媛県 渡辺曉童

蜂にさされて農夫一ぶく
男の義理の とかく物要り
身をすてて浮ぶ瀬のない世を嘆き
同憂と言うは飲みすぎ胃を思い
素人の素人らしさ買われぬ世

倉敷市 水粉千翁

さしのべる手のぎこちなくたくましい
客となるひと口ずつの箸枕
筆を置く絵になるいのち追うように
静けさへ滴一滴の轟きぬ
さからわぬ流れは小川だけのもの

東大阪市 久米奈良子

日盛りを歩いて恋は果てもなし
ニセ物の自分に惑う蟬時雨
晩学の筆ほめられて頬染まる
尼さまの生まれ変りと易はいい
盲人の声あかるきに救われる

竹原市 森井菁居

異端者で良し正論は崩せない

蠅にだつて生活権がある天井

ステテコでおれる非番を蟬しぐれ

秋になれば砂浜なんでもないところ

八月の六日を入道雲不気味

松江市 恒松 町 紅

倅せの今日からつづく鈴が鳴り

結局は内緒に出来ぬ母の金

天寿だと弔問客も気がゆるみ

他人様の布施の相談までも受け

ヤングパワーに遠い歴史の終戦日

大阪市 小出 智 子

旅心風も故郷へ向いて吹く

本買いし夜のたかぶりに茶を淹れる

やがて女であることが重くなる

夢のない女の部屋の水中花

眉描いて女らしい性をもつ

和歌山市 垂井 千寿子

少しだけ歩巾違っていた夫婦

嫁が来てちよつと変つたお茶の味

亡夫のあとに坐り茶の間でいたわられ

仕舞う時まで在りし亡夫衣代え

娘 妻 寡婦 静かに止まる走馬灯

岸和田市 高橋 操 子

合掌をすれば十指の素直なり

反省のこぶし親指とりかこみ

相談に乗る人が持つ離婚歴^カ

せわしさへ勿体なくも愚痴が出る

手料理へだれかひよっこり来ればいい

西宮市 島居 百酒

知已多き医者之恩恵受けぬ幸

出直しの利かぬ旅路の暮れかかり

度の過ぎる情と母は思うてず

じり貧をボロ儲けだけで埋る夢

ご近所か仲間か蟻の立ち話

大阪市 天正 千梢

ささやきを鉄砲百合は他言せず

無器用な老年恋に沈みかけ

生の吐息をかくす高笑い

御礼申せる位の貧しさで

冷そうめん供える膳に箸も置き

島根県 堀江 芳子

持病再発再入院

ピーポーに運ばれて行く落ち目かな

安静の恥らい多きことばかり

退院さんと握手わたしも意を燃やし

わがまをベッドにまるめ込んで臥す

富田林市 板尾 岳人

全身に山の男の詩刻む

うれしくて斜め斜めに溪下る

喋べりたくなればとぼとぼ峰歩く

山の峰雲にかくれてゐる帽子

山の幸ぶらぶらと実を熟す

大阪市 大坂形水

新聞の休み腹立つ活字見ず

友達も男と女のこと知らぬ

敵持ため男で夏をよく太り

温泉に泊って足の爪を切る

年金を貰い別途に貯めてゐる

大阪市 不二田一三夫

台風目のなる男 昼寝する

テロ輸出メードイン・ジャパン売れてます

小林多喜二を知らない女とカニさせる

寄席

花柳芳兵衛氏りんばせん炎で死去(69歳・49・8・15)

舞いの手をかざし奈落へ消えてゆく

極楽と地獄をきめる審査員

藤井寺市 西 いわを

坐禪していても水虫痒ゆくなり

ぶら下る糸瓜いよいよ無表情

痒いとこ探すくらいに暇が出来

遅蒔きへ申訳なき実を結び

竹原市 山内静水

日々好日妻よく喋りよく笑い

種明するまでもないかくし芸

趣味多忙妻にすまない日曜日
薬ほどたしなみもらったナポレオン

桜井市 岩本雀踊子

気まぐれに投げた石でも波紋画く

母子手帖血の連りをあたためる

カルテからはみ出すようになる命

手のひらのくぼみにのせてある生命

高槻市 福田丁路

遣り繰りの苦勞を隠す薄化粧

相談に乗って渦中に巻き込まれ

暁に祈って写経の筆を執り

みちのくの旅

みちのくもガソリン臭い風が吹き

松江市 柳楽鶴丸

無神論にも信ずる人があり

宇宙遊泳夢で楽しくしています

男にて候……割切っています

管理職研修に参加して

助言者の責任果たした一夜漬

香川県 三井醉夢

恍惚になるまじ源氏読み初め

現し世に源氏おわせば恋やせん

交換学生のアパート家庭をして

英会話よりも手まねがよく通じ

浴衣きてさくらさくらをよう覚え

大阪市 河野君子

岸和田市 葛城伊三郎

流木の運命か故郷のない女
梅紫蘇が一きわ鮮やか亡母の忌
ゆるゆると満月胸へ這い上り
島人の安らぎ墓標は海へ向き

泉大津市 村上春巳

快晴の室戸水平線の巾
団体が降りる札所の小さい駅
四国から魚と一緒に積み込まれ
新装の駅美しいアナウンス

倉吉市 奥谷弘朗

許可されたビールの小瓶に目を細め
吸物のねぎは我が家の庭で出来
女房の育てた菊がほほえまし
死んだ子が帰って来る気で盆を待ち

大洲市 堀内暁風

十二時が退屈そうな音で鳴り
疑うて見れば見るほどみなゆがみ
感情のもつれそれから意地と意地
方言も覚えて楽し旅どころ

島根県 小砂白汀

ど忘れをもとの角度へ来てさがし
ちよっとだけなら錆びても見たいステンレス
残り杭一本流れに立ちむかい
睡蓮へ落ちて真珠になる雨滴

腹一杯食うて瘦せたい葉飲む
田を売った金で米買う野菜買う
原爆をにくみ英霊忘れてる
医療費が無料になってから達者

富田林市 岩田美代

日やけた昨日の楽しさ電話する
花芯をのぞいて花を哀しませ
型破りドラマばかりで困るなり
生きているものの哀しさ盆灯籠

富田林市 和田維久子

病んで愚痴云うてあなたに済まぬ宵
風の日は風 雨の日は雨の画布を塗る
黒一色あなたは虹を描けという
打とけて明かせる乙女の心細

門真市 福島鉄児

孫満二才を迎える
泣かしても困り泣かされても困り
孫だます大人の知恵をもう見抜き
くれるまで動きませんと居据わられ
煙草の火だけは熱いと知っていた

大阪市 川口弘生

素うどんを大きな声で通される
貫録の腹を娘にけなされる
問われたら答える齡を女持つ

八月十五日生命の事思う

新宮市 大矢十郎

札束も二列に積まれ家が売れ
クラブ振る汗へ同情などはなし
間に合わぬ時が停年宮仕え
子がレール敷けば犬釘打つ父で

八尾市 高橋夕花

文机に詩心預けて夏に耐ゆ
夕顔に妻のところで髪洗う

短夜はちぎれちぎれの雲にのり
ふり向けば虹が下なるおんな坂

岡山県 嘉数千代香

貝殻のせめて月夜を光りたし
例えばの話が痛いところを突く
びっくり箱におんなの過去が詰めてある
仮面錆びついて個性となる怖しさ

東大阪市 竹中綾女

虫好かぬ人も一緒にバスの旅
清滝の流しそうめん蟬しぐれ
唄いたい人は唄わせ帰路のバス
お西さんの本堂ひんやり夏忘れ

松江市 小林孤呂二

真ん中で撮すポーズもこころえる
庭のある間取りもとれず鉢並ぶ
黄金色の秋を信じて離農せず

言いたい放題言って閑職恙なし

八尾市 香川酔々

年輪の中に宝石ちりばめる
道選ぶ賽の出方は六通り
造反の蜂円型の巣を作る
妻の持つ鎖りは武蔵でも切れぬ

守口市 羽原静歩

竹久夢二生家にて
夏草へ夢二の声が聞こえそう

面河溪に遊ぶ(一句)

面河溪指冷々と浸しいる
生きて行く坂どうでも登らねば
水芭蕉動くともなく風の中

大阪市 中川滋雀

折れ合えば小さな意地がまた疼き
すり切れたズボンの裾よ自画像か
代筆のまだ追伸がいる老婆
味噌汁のネギを忘れた倦怠期

堺市 高橋千万子

美しい蝶にも過去のある身なり
満月も今宵一夜であすはかけ
緊張の二人へバスがゆれてくれ
馬券買う男ふり向く事知らず

羽曳野市 塩満敏

夏の式秋まで待てぬ訳があり

大の字でパパはせめての夏休み

民族移動大阪駅は夏の陣

ホール・イン・ワン世の中そんなに甘くない

大阪市 本間満津子

熱帯夜遠い息子に手紙書く

蟻の列よけて通る足踏んでる児

間を置いて鳴けばずず虫涼しそう

美しく装いしても蛾は魔性

島根県 錦織文子

美しい夢でありたい距離に居る

縫い直し縫い直しして紺がすり

枇杷うれて子らには便りだけの夏

往復を鈍行にして詩の旅

大阪市 江城修史

名門の生きねばならぬ誇りすて

愛憎の極みうつろな声になり

不義理して昨日が空しいものとなり

若さへの郷愁派手な柄を選ぶ

守口市 村田瓢太

燃えつきる迄に一花咲かせたし

立場変れば上げよ上げなでもめる米

うたた寝を邪魔するような蟬時雨

最後の恋と残り火かきたてる

鳥取市 河村日満

一票へ微笑たやさず馳けめぐり

祝高橋月南氏の米寿(二句)

潮風に米寿の肌のなおはがね

今日もまた暑くなるぞと雲仰ぐ

神様に五針で済んだ掌を合わす

神戸市 仲 どんたく

道問えば方言温くう教えられ

独酌は猫へ心のうちを云い

お日がらも良く嫁さんへ手付け打ち

よう来たとエンタツ三途の川で待ち

高槻市 若柳潮花

関取りへ蛇の目が似合う法善寺

炎天で無駄なおなごの立ち話

奥琵琶湖より賤ヶ岳

紅鰯の造りに酒のない夕餉

やっと手の届くところにあけびの実

東広島市 高橋鬼焼

折鶴の二千羽核を許すまじ

夏やせを故郷の風にいたわれ

あみをすく漁夫よ希望をまだすてず

渦さけて平和をはこべ流しびな

松江市 中川晃男

目にしみる男の汗は腕で拭き

一昨年水害・昨年渇水

程々の雨で市庁もホツとする

去年の雨乞い 今年へ叶えられ
原点に戻れ と文化の袖を引き

東大阪市 竹中 肖二

子と孫とみんな揃って祝う古稀
実感の湧かない古稀を祝われる
張り終えた果を振ってみる蜘蛛の性
千年の歴史を抱いて眠る古墳

宇部市 平田 実男

甲子園(二句)

失策をいたわるほうも泣いている
想い出も一緒に入れる砂袋
自慢ともとれる交際費を愚痴り
立秋の暦を笑うように照り

倉敷市 小幡 里風

帳尻だけ合わせて後味のまずいこと
来春は咲かそう球根の色を振り
振り上げた蟹の両手に訓えられ
二つの拳使う術なく坂六十路

高槻市 山田 季賛

看護婦さんが頑張ったと褒めてくれ
安住の地もなく停年近し病みつづけ
病むベッド今日晴天の窓を明け
病むベッド句信便りが楽しませ

大阪市 室谷 徹舟

炎天や失意の足へアスファルト

暑さばけしたと上手にとぼけられ
夏やせへ未だ開きます自動ドア
動かせば妻も暑いとばやいてる

大阪市 阪上 十止庵

ドラマならいのちを捨てる恋もよし
陽の強さ知って氷は丸うなる
男ならかく消えゆかん陽が沈む
たとえばの話にしては目がきつい

京都市 都倉 求芽

走り書きにほんとの個性見てしまい
ジョッキ空けてからの汗は愚痴らない
雨あがっているのに雷まだ未練
こけし回すように床屋は首を捻じ

鳥取県 鈴木 村瓢子

鳩の豆売り東京に住んでいる
飲む男踊る女で場が出来る
植木屋に摘ませて鉢聞きほれる
来年も生きるか種を藏つとく

柏原市 大崎 可動

炎天に肉体があり土を掘る
父の足跡で甘い水を掬む
カンナの朱自爆の果の火柱か
人間のドラマ一生灯を慕う

奈良市 宮口 笛生

磯の香をばらまきさざえ焼けてくる

夕涼み一雨欲しい星の天
酒の出る席は皆勤の男なり
御供に埋って亡母の一周忌

平田市 久家代仕男

南瓜棚むかしは防空壕を這い
鶏糞の処理へ苦情の東風が吹く
盆栽の水へ素足の触感よ
非農家が日増しにふえて寄附でもめ

岡山県 竹内翁童

賞与と云うムチで半年走らされ
情熱のはは定年に断ち切られ
楽書きのような夫婦で年老ゆる
免罪符さがしさがして生き続け

今治市 越智一水

腰すえてすえて話すも盆なるか
太陽をとらえて光る水しぶき
小鳥よ小鳥生れ故郷を知らず啼き
美しく見えていさり火あがいてる

京都市 松川杜的

エアポート詩が出そうな雨になり
人間不在風鈴の鳴りやまず
夕陽がきれい陸橋を渡ることにする
雲を見る暇が欲しいと思う日

米子市 林瑞枝

主婦一歩外で落付く切符買う

子が巣立ち人生それから少し解け
喜びを他人に強いるお人好し
重い荷も軽しホームで待つ笑顔

神戸市 小浜牧人

合掌の指から慾が透けて見え
人間らしく生きる振り子の捻子を捲く
階段の途中で老いを意識する
ひとそれぞれ明日を想う星光る

大阪市 金井文秋

俺とした事が不覚な医者通い
テニスコートの端へ雑草追いやられ
虚勢ではプライドの傷つくろえず
欲張りと言う弱点へかける罠

大阪市 宮尾あいき

大鳥神社へ孫と宮参り
低音の祝詞へ雨は遠慮せず
瀬戸の旅(一句)
紫の山が押し出す島の月
老いめだつ今朝の鏡にとまどいぬ
お盆なのに亡夫夢にも顔みせず

大阪市 柳原静香

瀬戸内の旅
女連れまず旅着からプラン練る
旅馴れぬ女に瀬戸の海は風ぎ
画布張れば絵になる港夕焼ける

下心あるプレゼントでも母嬉し

東京都

山根白星

歎異抄救われたいと思います
会社での私は隠れキリシタン
ふと我にかえる幕間の現実よ
ニャー・ミスころならずも娶る羽目

氷見市

関美子

無神論子が病んで母口にせず
再びのない秒針にさいなまれ
四角い街つづき落葉の詩がない
ふる里 おふくろ カスバの隅も秋

米子市

石垣花子

叫ぶ子の声 風船は空で聞き
面接へ長髪切った甲斐が有り
色眼鏡捨てて姑も笑顔見せ
着せてから綻び繕う共稼ぎ

東大阪市

落合思月

戯れの言葉へハイミスすがりつき
抜け道があるから人間生きられる
愛妻をうるさく思う日もありぬ
楯突いたことを自慢の平社員

大阪市

西川誓二

親娘三人竜神温泉に遊ぶ(一句)

親娘の夢破る瀬音の日高川
突っ走るインフレにのろ間な制動機

日は好日妻と嫁の波しずか
今日の枷はずしてくる終業ベル

大阪市

岸柳信

行く末は思いたくない物価高
設計図えがいてからの荷ごしらえ
年寄りに買ったクーラー嫌われる
墓参するゆとりへ感謝出来た今日

豊中市

戸田古方

宇宙までとどく碧空大胆に
ノストラダムス弥勒の微笑かもしれず
神の国へ少しあせりすぎているようで

名古屋

吉田水車

ほっとけば朝顔天まで行くつもり
盂蘭盆会蟬のなきがら地に還えす
白山の残雪仰ぐ田植かな

大阪市

福井野迷路

生みたてのたまごを走る蟻一匹
独りきく声に詩あり秋の蟲
真実を述べたら税吏顔をあげ

松江市

岡崎祥月

燃えて燃えて六十の愛 妻のもの
旅ゆけば旅はたのしいパノラマさ
筆持てば即吟すらすら紙にる

倉敷市

藤井春日

頼みごと聞かねば冷い人とされ

若輩で抹香臭いことを云い
慈父ゆえに敵母たらんとして喧嘩

岡山県 直原七面山

赤い傘から赤い雨だれ
蚊と対決も老いの一徹
夢捨てず居たので恋にめぐり会い

大阪市 神谷凡九郎

弱者救済もうそのストは済みました
転がってコロコロ紙幣まで逃げる
人歩く何か目的あるように

神戸市 中村ゆきを

海見ゆる丘でも他人様の庭
恩師から転居の知らせ飲みに来い
炎天にバス待つ母子原爆忌

兵庫県 河原みのる

略章の黥六等を誰も見ず
今日もまた予報へ義理の俄雨
外遊という奥の手のあり羨まし

兵庫県 大江秋月

いい顔をしとると庭師石を撫ぜ
雷を連れて夕立派手に来る
話題吸いこんで換気扇が舞う

出雲市 原 独 仙

古傷も時効となれば馬鹿みたい
久し振りに土用雲湧き蟬しきり

孫のバット借りて打球を見失い

岡山県 出原敬一

流し腫の会釈が妻の眼と出会い
単身赴任へ嘘はないかと夫人来る
揺り椅子から利子は先取りするお声

大阪市 河井庸佑

かけっこのびりの子ども夢があり
お互いに片意地はってるだけのこと
敵を知り己を知って手を出さず

大阪市 児島与呂志

機を見るに敏なる男の目が嫌い
信用をされ過ぎている肩のこり
寺の庭とんぼも遊ぶ池を持ち

和泉市 西岡洛醉

無遺無産空蟬の如 母の逝く
雪駄ジャラジャラジャンジャン町の足
女房の知らぬ特芸三昧に乗り

八尾市 大路美幸

満ち足りぬ男が旅で詩を拾う
寝転んで妻も見ている原爆忌
一步步つ重ね金婚の八合目

兵庫県 遠山可住

五人五色の夏が行く 女
先輩の顔で晴着へ渋う着る
粗品進呈成程間違はなく粗品

青森県 木村 涼人
何をくよくよノスタルダムスまで生きず

モナリザと違う微笑で地蔵様
新社長なめられそうで髭を立て

姫路市 梅谿庵 不酔

泣き笑い俺かて痛い向うずね
管理職モットモットと尻を押し
本能か左右交互に歩きだし

松江市 舟木 与根 一

梅雨明けはほんものらしい蟻の列
桁違いしていた値札から離れ
混浴に女ばかりでひき返し

呉市 林 野 甦 光

荷くずれを提げ日通が家聞き
後添とうまくいって常夜燈
駈け引きの迂濶に乗ったアクセント

唐津市 新岡 回 天子

言づけを聞いて伝える停留所
初めての名刺をつかう係長
竹の葉がゆれて静かなひる三時

岡山市 大森 娛 句 楽

虚栄心子供に甘いところを見せ
蒸し暑さ花火に乗って空へ散る
路郎忌の句碑台風八号浄め

大阪市 飛 田 好 一

伊勢の宿海老は冷凍ものと知り
子の年を数えて巡る終戦忌
健康の肩を叩いて久し振り

岸和田市 植 山 武 助

どん底で溶け合う味を見付けたら
愚痴でない愚痴をこぼして娘は帰り
安易なる妥協若さが承知せず

大田市 藤 田 軒 太 楼

丸出しの訛りが集う盆休み
実りなき徒労夜道の星仰ぐ
うち解けてみたいが驚鼻気に喰わず

堺市 伏 見 茂 美

母と娘の意見が合わず今日はやめ
亡き姑がほめてくれそう盆の髪
がんばれとイチヨウが少し黄ばみかけ

茨木市 吉 川 米 子

忘れまいとくくった指ごと忘れ
まずいのが又きたいつもの里みやげ
袂から唄がこぼれる盆おどり

鳥取県 清 水 一 保

五十年お仕えしたと歯が背き
束になって来いと若さを海が待ち

大山登山

あちこちで友を呼んでる霧の峯

西宮市 藤 村 女

母親をたすけて孫死産す

命母へささげて呱呱の声上げず

竹トンボ鍵っ子の眼に秋の空

御本家と和解が出来た通夜の席

大和郡山市

森田カズエ

血圧も便乗してる物価高

ゲラゲラと笑ってすぐに腹も立て

新薬の名まえおぼえて病みなれる

竹原市

時広一路

酒という強い味が控えてた

馬鹿な意地男は損なこともする

仕方なくつけた心にならない仮面

松原市

玉置重人

しょうむない耳が雑音ばかり聞く

計算の水着バストがこぼれそう

二の足を踏むのも哀しい寡婦の性

笠岡市

出原真奇

孫あずけ娘等はさっさとカーで出る

似るところもあろうに三代目も養子

父逝って夏草繁る墓地となり

松山市

谷のぶお

人の後歩いて来たら辿りつき

妻の留守食べぬわけにもゆかぬなり

回れ右かかわりのない事にする

大阪市

河股緑水

みんなして泣かぬ女にしてしまい

迷い来し仔犬一日友とする

花散って咲いて亡妻七回忌

守口市

野呂右近

セールの鞆重たく炎える夏

養殖の昆虫同居2DK

美しい緑に住んで都市を恋い

諫早市

原田明春

人工で育てオッパイ飾りもの

腹の虫殺せば平でほんとにかれ

なせばなる待てどなるようにしかならず

島根県

榊原秀子

湯けむりの中に一人の大胆さ

ひょっとこの面が欲しいな物価高

ベルが鳴るわたしの今日の始まりに

尼崎市

高津徹也

眠れねば母の背の丸み思う

手づかみにしたい空気の青い丘

星座ほどはるかに青きものはなし

米子市

増田竹馬

長電話確め合うて恋進む

万歩計朝顔今日も話しかけ

つばめの果見上げ育てることに決め

東大阪市

斎藤三十四

半泣きの顔へ調書の刑事室

御先祖の山ひとまたぎハイウエイ
商法に明治の義理が生きている

岡山市 永宗 宗義

火に油かけて女通り過ぎ

夕焼の空が希望の色に染み

限界に脱いで波に身を任かせ

榎原市 岩井本蔭棒

この僕を善人と見た耳打ちか

老いてまだ比翼の鳥と羨やまれ

夕立ちへ釣り師ゆっくり雨具つけ

今治市 原田 一風

バイブルを素直に信じ子沢山

減った髪せめて伸ばしてゴムで止め

総入歯むし歯の辛さもう忘れ

大阪市 藤田頂留子

筆不精暑さのせいにして無沙汰

聞き惚れて踊りの手が止む節上手

横顔を見せて互いにわびを待ち

岡山県 池田古心

ミイラ化の母面影も崩れ来て

長生きの秘訣長生きして悟り

なけなしをはたいて希望者ゲバを振り

東京都 大山と金

浴衣着て寛いでいるわれ一人

鮭の皮残せばドサン子喘うなり

緋とピンクほどの感覚の差

大阪市 今西章雅

靈魂不滅我が子が五人分けてある

扇子で日除けて久々戎橋

老齡年金甘えさせない額で呉れ

小松市 馬場魚山

出来る子へチャイムは心地よくひびき

留守番の得は砂糖をうんと入れ

ゴキブリが金かけさせた台所

玉野市 小谷仙山

間違いは誰れにも有るといなおられ

何もかも忘れて生きる事に決め

冗談でしよう冗談でしようと本気なり

倉吉市 渡辺菩句

出張に夏休みの子を連れて出る

風鈴の朝起きさんに起こされる

博多

竜宮寺ここより涼風生れたり

貝塚市 行天千代

万策もつきて煙草に火をつける

話し上手今日もお昼を食べて去に

東京旅行

江戸の味浪速の口にチト合わず

大阪市 神田秀峰

子の世話にならぬと霊園まで予約

簡単に読ませぬ大家の墨の痕

仙台市 川村映輝

退職をしてからぬるま湯好きになり
年金がベアするほどの物価高

宿毛市 山本窓花

朝顔と夕顔に似た共稼ぎ

夏の色肌に残して早秋を着る

神戸市 佐々木静泉

富士五湖めぐり(二句)

バス酔いをすまいと飲んで酔いつぶれ
見えがくれする富士へも一度ふり返り

大阪市 鈴木生仏

鉢の木に水かける気で酌をする
市場籠提げて魚の値を見つめ

大阪市 稲葉星斗

お隣も読んでるらしい秋の夜
晩秋に感冒薬が切れて居り

若本多久志

老い(二句)

お元気ですかにも勤ぐれば腹が立ち
活淡無欲それが長寿とは無情

通院(二句)

心にも注射を打って欲しい日よ
妄念は身にあるまじきものばかり
凶弾に倒れることも美と思う

おじいちゃんの新米孫の句ができず

再就職まだ老後とは思うてず

張り切らんかな古きものよき時代

休日ふえて給料もとのまま

見合写真届けた酒はよく廻り

川村好郎

ちぎれゆく雲に架空の人おもう

云い分の双方聞きつつ嗜むあくび

橋筋をせかせか抜けるうれしい夜

ともかくもシャッター威勢よく上げる

お隣へ賞与割増して喋り

西尾 榮

(九月七日吉川英治忌)

颯風の進路のニュース雉子郎忌

雨につけ風につけ亡母のこと雉子郎忌

笑い合は貧しさでなし雉子郎忌

酒のしみ質の値をいう雉子郎忌

初いとど ききたる今宵雉子郎忌

菊沢小松園

雨洩りの汚点の下なる産声や

触れられたところから疼くのも女

欺されてからは乳房に用もなし

もう二度と会わぬつもり靴をはく

自由主義天皇心易い人に見え

俳風柳多留廿五篇研究

(三)



亮 原 西
(教員)

〒940 新潟県長岡市蔵王2-3-3

紀内恒久・室山三柳・青木迷朗
入江勇・西原亮・清博美
鈴木黄・八木敬一・岡田甫

50 あいさびへまっかにすぐがきついみそ

紀内一洒落本『当世風俗通』(安永二)に
「小袖」と題して次の文章がある。

夏ハ越後ちぢみの、しま。あるひハ、小
紋。さつまの藍さび。さてこそ、川柳が

小倉山百選の歌に、

藍さびに赤くうつるかきつひ味噌

句意は、藍錆色の小袖から下に着ている赤が
透き通って見えるのが通人の風俗であり、当
人にとっては大変な自慢ということであろう
が、『当世風俗通』引用の句は、主題句以前
で、出典は不明。

青木一賛。『川柳辞彙』脚註に「緋縮緬の禪
が」とあり、これでは男女何れとも不明であ
る。赤味のある藍になお「真っ赤に透く」

「赤くうつる」だから、女の湯文字の様に思
われる。「きつい味噌」はひどく自慢する
事。

西原一賛。「カッコいい」通人の風俗がしの
ばれる。

室山一同。色のとりあわせよし。下着でも赤
ふんどしでもよいと思う。

八木一藍錆の薩摩上布は、それが夏物である
から、地が薄くしかもシャリツとしている所
が値打ちなのである。地が極めて薄く、下の
襦袢がまっ赤に透いて見える所がきつい味噌
なのである。

岡田一アイサビの薩摩上布は、八木氏説のよ
うにサラサラとした上布、夏向きですから透
けて見える。

51 哥も句もはの字とまりハ古てには

紀内一不明。「はの字とまり」という技巧が
ありや。御教示下さい。

青木一小町、其角の雨乞の歌と句。共に「は
の字とまり」。小町の歌は「ことわりや日の
本ならば照りもせめざりとてはまた天が下と
は」、其角の句は「夕立や田をみめぐりの神
ならば」である。「てには」は、和歌・俳諧
の異称。

西原一青木説御明解。「古てには」には、モ
ダニズムに非ずの意もあるう。

八木一同。具体的な歌・句、不明でした。
謝。

岡田一賛。

52 桜の毛せん桃に出しておき

紀内―毛氈は雛祭りでは雛段に敷き、また花見の時には花見の座に敷く。従って花見の時に使う毛氈、その直前に出すのではなく、雛祭りの時に使用してから……という句作。それを「桜」「桃」と花で対比させている。

もふせんを雛からすぐに出して置

明三・松2

室山―同。実際にはそれぞれ違う毛氈だが、

毛氈を使用することが同じなものと、礎解の

「花」のとりあわせ。

岡田―同。

53 きのきかぬ人と山吹おいてにけ

紀内―有名な太田道観の故事。雨具を借りようと、あばら屋へ入った道観、娘の出した山



川柳塔社同人の

胸にかがやく

シンボル・バッジ

追加調製中

一個千円（桐箱入）

送料本社負担

吹の花の意が判らず「雨が降っていて雨具がほしいのに山吹という役にもたないものを出して、全く気がきかない女だ」といったであらうとの句。

山ぶきの花だがなぜと太田いひ

二三・17

青木―賛。

雨やどりまでは武骨な男なり

二〇・16

室山―賛。「きのきかぬ人と」思い「山吹をおいてにげ」たのは娘。

清―室山氏の通り。貧乏であることを明からさまに云えないからであるのに。

岡田―同。

54 遊び所をあんじている病ミあかり

ご批判ください、残部が百冊ほどあります。

川柳塔社

同人句集

『川柳塔』

価 一、五〇〇円
送 一六〇円

東野大八氏―立派な布張りの豪冊ぶりに驚きました。

岡田 甫氏―意外にも新鮮な句が多い。堂々たるものです。

発行所 〒542

大阪市南区饒谷中之町二〇

川柳塔社

（振替口座 大阪・三三三八番）

紀内―遊び人の病ミ上り。病気のため、あち

こちの遊び所に御無沙汰してしまったが、忘れられていないだろうか、様子は変っていないだろうか、色々気をまわしているという句。しかし、こんなことを考えるようであればまず大丈夫。再発の心配はなからう。

青木―賛。病気が快方に向って来ると、しばらく御無沙汰していた浮気の虫がまたぞろ頭をもち上げ、柳暗花明の巷が恋しくなってくる、というのではなからうか。

室山―青木説賛。ただ「浮気の虫」とすると亭主に限定されるので「遊びの虫」としたい。この「あんじ」は、考え、もくろみ、計画の意。

岡田―同。

伊予にいたとき、松山の俳人は仏教徒より多いところだとよくきかされた。いわゆる「俳句宗」とも名づくべき、俳人のメッカというどうせ比喩だらうが、このことはこの地に子規の墓があり、ために虚子、碧梧桐らの巨匠の足跡いと濃厚なことにしよう。

ところが美濃に移り懷んでみると、ここでも伝統俳門の怖るべきメッカであることが日ならずして了承できた。この地は俳聖芭蕉が往来の足繁きこともさりながら、蕉門の逸材各務支考（岐阜市出身）や広瀬惟然（大垣市出身）がその曳杖にすがって世に出ていることにも由来する。そして後年、正岡子規が俳句への傾斜を開始した時点で、美濃を訪れてさえる。実績からすれば松山より数段上だ。

さてこのような古典蕉門の名跡地美濃に対して、怖るべきという字句に傍点を付した所以は、美濃は獅子門本貫の地で、今に至るも、美濃派蕉門は二派三派にわかれて抗争が絶えないのである。

美濃派、獅子門とはそも何か、ということになるが、要約すると獅子門の系譜は、芭蕉を祖師とする一派と、支考を始祖と数えて代々高弟が一門を統率していく形とみてよい。統率者を道統宗匠と呼ぶ。この場合、芭蕉を道統一世、支考が二世となるのだが、支考の

あと仙石盧元坊が三世、田中五竹坊が四世を継いだが、このあと安田以哉坊と河村再和坊との間に確執が生じて、それぞれに五世を称しあう。世にいう以哉派と再和派の両派の出現がこれである。

両派はともに四世までを正統系譜に掲げているが、以哉派は現在三十六世（川井一白）再和派は現在二十五世（丹羽百穀）と連綿と繼承されているが、一むかしほど前、再和派は、以哉派との合流問題がこじれて二十二世高橋玉泉が一派を唱え、われこそ獅子門の本流だと呼号している。この獅子門は美濃派から発して全国に支社系列の結社をもつてともに勢威を誇る形をとっている。

獅子門の特質である道統宗匠の就任披露の立机式目の厳しさは殊のほかのものがあり、ヤクザの世界の超大物の跡目披露の格式の上をいくほどである。美濃のローカル新聞社の編集デスクにある余徳で、これらの消息や、式目の厳粛さをじかに肌につれ、筆者は中國大陸における在家裡の帯組織の再現とも意識

した。と同時に、自由活潑な川柳界の在り様に心からの安堵の想いに促われたことでもある。

さて、このような美濃派の獅子門の確執の中へ、政治が介入してくる。

明治十一年岐阜県々令に小崎利準が着任。同十八年知事に任ぜられた。彼は三重県鈴鹿の亀山藩士の出で、美濃派の俳人であり、以哉派である。この俳人知事の後盾を得て以哉派十七世橋棚碌堂が、林容珠を知事担当として大いにとり入り機関誌「獅子門」を出刊したりして、同派は大いに羽根を伸ばせた。

このため再和派の道統宗匠神野曙庵（明治五年十六世就任）は、明治五年四月に教部省（のちの文部省）が特設した「俳諧教導職」に着目した。このポストは俳諧を通じて民間の思想指導を目的としたもので、いかに明治政府が民間の俳諧人口を重視していたかがわかる。同職の指導規範はつぎの三条――

- 第一条 敬神愛国ノ旨ヲ行フヘキ事
- 第二条 天理人道ヲ明ニスヘキ事

官製俳諧教導職

第三条 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシム

ヘキ事

およそ俳諧人にとっては縁もユカリもなさ
そうな奉戴勅語なみのしろものである。翌六
年三月、その官製教導職に任命されたのは三
森幹雄、鈴木月彦、月ノ本為山、小築庵春
湖、島越等裁の六名である。彼等は俳人であ
るとともに往時の文芸部門の学識経験者とい
うところだ。彼等は「俳諧新誌」「明倫雜
誌」を出し、芭蕉の句を教訓的に解釈し、反
面教訓的俳句を国民趣味にとり入れようとし
た。この教導職は、政府任命の形でつづけら
れたが、明治十七年八月廃止となり、民間宗
教団体に任命権を持たせた。

曙庵は、官製教導職のころから俳諧教導大
講義という教導職支配の普及員の立場で活躍
していた。そのおかげで民間移行と同時に教
導職となった。官製移管直後だけに、相当の
神通力を示し、これをもって知事スポンサー
の以裁派に対抗した。げにおさるべきは趣味
人の根性である。

再和派曙庵の同志、松井紋之丞（名古屋）
は、その「俳諧秘事大全」（明治26年其中堂
刊）で「俳諧は孔孟の教に順うの国教なり」
「仏果を得るの悟道なり」「俳諧は人倫五常
を心に治め、花に吟じ月に嘯き以て文化の開
明を育するにあり」といかに官製俳諧奨励

のサンプルをみるようだ。

俳諧をこのような教訓的かつ倫理的思惟の
手段にこじつけたことについて芭蕉先生も大
いに面食ったことだろうが、文明開化の時点
における日本文化の揺らん期に、俳諧が一つ
の国家的意味づけをもつて大きく大衆に存在
づけた点については一応の価値あるものと評
価しておいてもよろしかろう。

最後に、美濃派が芭蕉を祖とし、支考が開
いた形のものだが、四世五竹坊の時、以哉が
五竹坊の加朱を許さなかったことから破門さ
れ、自ら五世を名乗ったのと、五竹坊の流れ
の再和坊がまた五世を名乗ったことから、二
百数十年の両派の相廻がつづくわけである。

この両派の対立の因子は、書けば長大なも
のになるが、端的に要約すると芭蕉を祖師と
みるか、支考を始祖に認めるかの相違にあ
る。支考の著名な俳諧理念は「俗談平話を正
す」ということが美濃派獅子門の、根本的な
因子をはらんでいると考えられる。この支考
の仮名詩は、和製漢文を脱して、日本流の口
語で俳諧に戻すということにつきよう。この

東野 大八

仮名詩は「武玉川」の慶紀逸も同調していく
ことになるが、要は芭蕉の芸術性の純度を離
れて、しよせん赴くところ支考流の門流に墮
するところになった。つまり支考の門下が年を
経るにつれ遊俳の徒の趣きを呈しはじめる。
純度の高い蕉門がこれらを「支麦の徒」（麦
は麦阿のこと―支考の同志）と蔑視するの
も成り行きである。支考が晩年に、涼菟らと
「二重袋」（享保12年）に収録の

たばこすき馬士のあたまをあぶながり
たばこすき手を田植から借りにくる

ふところはまだ菖蒲湯の香が残る

これらはあきらかに川柳である。この一句
立ては、町人の遊俳に傾き、世の士大夫の風
雅は蕉門に胸を焼いた―こういうこともいえ
る。美濃派獅子門はかくして子規が岐阜を訪
れても、近代俳句の騰勢にもビクともしな
かった。挙句の果てが今にもおよぶ狂俳の横行
である。

美濃はこうなると筆者にいわしむれば川柳
発祥の地の道標を建つべしということにな
る。

49年度路郎賞受賞作

楢山へ背負うて呉れる

子もおらず

倉敷市水島東弥生町六の三

藤井春日



秀句のみのり

中島生々庵

路郎賞受賞作

楢山へ背負うて呉れる子もおらず

倉敷市 藤井春日

この句の推せん者と、作句者とは、私も含めてそろそろ楢山などを考える年齢域になっている共感に捕われているのではないかと、ふと思っても見た。しかし深く味わってみると、一種のユウモアを感じこそすれ、いささかの暗さを感じない。本年度の路郎賞として自信をもって推し得る秀句である。

同準優秀作第一席

一と粒の種 太陽は見逃がさず

倉敷市 本田恵二朗

9月4日の常任理事会は、49年度の路郎賞(第九回)と、川柳塔賞(第八回)を決定した。台風16号17号とやらの影響で編集室の熱気はいやが上にも高まって来る中に、一年ぐらいはほんとに早いものだアと今更感心顔である。昨年から実行されている通り、各選考委員から推せん原稿を編集部の一三夫氏が選者名も作者名も伏せて清記したものを常任理事会に提出され、主幹が最後に路郎賞の優秀作と準優秀作二句を決定した。長月間にわたる選考委員諸氏に対し毎年のことながら心から畏敬の意を表し、作句者の皆さんの益々ご健吟を祈念する。

簡単に優秀三句に対する私の選後感を述べさせて頂く。

浄土真宗の正信偈の中の「大悲は倦くことなく常に我を照す」という一句を思い出さずには居れぬ。大自然があまねく平等であり、

略歴

昭和二十七年四月田垣方大さんグループの水島川柳会に入会後川柳支部として方大さん故人の谷水さんの指導を受く。昭和二十八年九月不朽洞会員として路郎師の門下にて本格的に川柳と取組む。昭和三十三年健康を害し脱会のみならず、その後当地丸文川柳会により柳友翁童氏を得丸文川柳会を結成聯会のクラブ活動に励む。昭和四十四年三月川柳塔同人として復帰今日に至る。

職業「デザイン TENT 製造販売会社経理部担当」
明治四十三年十月岡山県浅口市寄島町に生る。

力強く、遅く我々を包んでいる事を、感謝一ぱいにうけとめて居る。叶うことなれば、この句がどんな場所で、どんな心境で出来たものであるかを知りたいものだ。

石だたみの余韻 歴史が通り過ぎ

大阪市 正本水客

心に残るひびきに似た余情が、ふと胸の中を横切る。そのあとから、さまざまの物語りが追っかけるように通ってゆく。長崎の街の石だたみが、今静かに雨にぬれているのではないだろうか。俳句調のくさみのない川柳詩情ゆたかさに頭が下がる。

路郎賞候補作品

(到着順)

正本水客

中年や父に優しくなろうとす
松茸も食わずかうか秋がすぎ
よちよちと追えばよちよち鳩も逃げ

小出 智子
村上 春巳

誰にでも似ている顔で孫生まれ
冬になる音 雨になり雪になり
膝坊主 砲列敷いてお茶の席
遠くより塔は祈りの如く見え

室谷 徹舟
堀江 正朗
福井野迷路
西 いわを

出る杭になろうと土台蹴って見る
準優秀作第二席
野村太茂津

☆

川村好郎

年の瀬に身を置きたくて街に出る
推 薦 作
谷垣史好

準優秀作第一席

石だたみの余韻歴史が通り過ぎ
推 薦 句
正本 水客

準優秀作第二席

木枯しも言い分あつての鳴咽たり
人間の特技笑顔が作れます
耳を閉させ風は言葉をつくるから
義理一つ返せば心の灯がともる
見えぬとこ結ばれている夫婦岩
炎の輪くぐり抜ければ凡婦かな

岩田美代
小野 克枝
関 美子
江城 修史
川口 弘生
三井 醉夢

売れ残ったらどこへ行くのか甲虫
年よりが動きすぎるのにも困り

☆

若本多久志

優 秀 作
一と粒の種 太陽は見逃がさず

準優秀作
本田薫二朗

生き抜いて流転の風を聞けばかり
準々優秀作
羽原静歩

かあさんの墓 かあさんがいるぬくみ
さりげなく礎石は塔を支えきり

反省がこんなきれいな朝にする
宮口 笛生
小砂 白江
能登原白水
高橋千万子

やりばない心の迷い香をたく
逆境の友へ秋風そつと吹け
原 独仙
和田維久子
木村弥栄子

凍てた道踏みしめ女の遠い旅
ときつける櫛へ炎はさめやらず
水仙が咲いたよ仏さまへ切る

三回の中間推選三十五句中から、五回にわたって、選句しました。十七文字の詩の中に、それぞれの人間性と哲学を詠まれた、い

ずれ劣らぬ優秀句として、ジーンと胸にくるものがあります。

☆

北川春巢

推 薦 句
植山へ背負うて呉れる子もおらず

(評) 選りに選って、路郎賞に推選した句がまたも淋しい句になってしまった。が、この句は、世の中のこと、世の人の親の心情を巧みに詠んでいると思う。

私ことを書いて恐縮だが、数年前に長女が結婚して家を出て行った後、戸籍からその名前は斜線を引かれて消されていた。めでたいことだと思っていた。所が昨年、男の子が結婚した。三人いるのだが、故あって次男が真つ先きに式を挙げた。次に三男、最後に長男という順序だった。故あって、といいたのは、長男の嫁は親たちの世話をしなげればならぬというので、相手の方が次々と辞退してしまつたという次第。結婚後に戸籍謄本をとって見ると、次男、三男は無縁のこと、親たちの面倒を見る、といっていた長男の名前までが、先きの長女同様、斜線でもって抹殺されていった。我々夫婦の戸籍は、もう我々二人だけになってしまつていた。ちよつと夫婦で、どきつと。戦後民法が変わつて、夫婦二人、という核家族になつてしまつたのだ。

この句、「植山へ背負う」というのは、「植山節考」の娘捨山の伝説のことである。作者には子供があるのか、ないのか知らない。単なるフィクションに過ぎぬかも知れないが、子供はあつてもなくても、私の例で分るように、親が年寄れば同じことなのだ。世の中を実によく見ている句だと思ふ。戦後、「家族社会学」という学問が盛んになって、このような問題を多くの学者先生方が議論しあっている。その大問題を、僅か十七音字で

表現し尽くし、しかも、そこばくの哀感を出しているのは大成功である。

準 推選句 (二句) (推選順)

(一) おとなしい方と仲人四捨五入 福井野迷路
(二) 男嫌いなどと化粧に念が入り 恒松 町紅

準 推選句 (七句)

(一) 綻も縫えず G パンよく似合い 木村 涼人
(二) 包帯を尋ねてくれぬのも淋し 遠山 可住
(三) 増築をするほど歯医者へ持って行き 平田 実男

(四) こっちの水は甘いから孫が来る 金井文秋
(五) 無い袖を子に振り夫婦寝正月 関 美子
(六) 柏手が澄んだノ叶えて貰えそう 八木千代
(七) 味気なく下戸と花見をして帰る 葛城伊三郎

運後に、

今回の路郎賞候補作品は、昨年の十月号から、今年の八月号まで、計十一冊の「川柳塔欄」から選ぶことになった。句数が多いほど、名句のある率も多いわけで、例年より対象の雑誌が一冊少ないということは、選者にとってははくだが、名句があるかどうか心が配だった。ところがご覧の通り、名句にはこと欠かなかった。この点、他の選者も同感ではないかと思うが、私はかえって今回は名句が揃っていたようにさえ思った。また他の選者がどんな句を選出されたかは、発表になるまでは分らないのだが、年を逐って各選者ごとに、バリエエティー豊富な句が発表される傾向のようである。そしてその中から主幹によって、一句の路郎賞の句が選ばれるのであ

る。主幹はいわゆる「川柳塔の匂い」のある句を推選される由であるが、その「匂い」も年を逐って変化して行っているように私には思われる。毎年の路郎賞の句により、「川柳塔の匂い」の軌跡をたどってみるのも興味あることではなからうか。

☆

菊沢小松園

路郎賞推選句

ステテコで我天皇を養ます 工藤 甲吉

一と粒の種 太陽は見逃がさず 本田恵二朗

焦つても廻転椅子は向うむく 香川 醉々

石だたみの余韻歴史が通り過ぎ 正本 水客

耳を閉ざせ風は言葉をつくるから 関 美子

かあさんの墓 かあさんがいるぬくみ 宮口 笛生

嫁ぐ娘の心へ持たす銀の鈴 小浜 牧人

子が生れその子が生れ消えるのみ 大路美幸

ターミナル一期一会の群ならず 中川 滋雀

今のとこ眠れる獅子で居てやろう 藤井春日

☆

西尾 栗

手付金これが苦勞のはじめです 竹内 翁童
ターミナル一期一会の群ならず 中川 滋雀
球根のまんまで終る性哀し 河野 君子
人間の特技笑顔が作れます 小野 克枝
歌留多とる過ぎにし恋の声上げて 岩田美代
ハラハラしていても父の座に父で居る

朝市でまだ憶病なエビのひげ 遠山 可住
渦潮のここが見せ場とかもめ舞う 関 美子

保護色の中で虜になっている 宮尾あいき
小出 智子

泣くときに泣ける路傍の石でよし 松下梁水
同

役どころ心得て来る割烹着 出原 敬一

特 選

雲は挽歌雲は新生恩師の忌 橘高 薫風

既に一家をなす選者の句を特選に推薦することに、些か抵抗を感じたが、佳句は佳句として、推薦するのが当然と思ひ返して敢えて推挙した。

非常に格調高い句で、川柳塔のカラーが、又川柳塔の方向付が、又路郎先生の指針を適確に示された句として、推薦する次第である。

受賞の感想 藤井春日

このたび榮譽ある路郎賞の通知を不二田先生から頂き感想文を書けとのこと、いまのところ実感が湧かない状態です。

一度は受賞をしたいものと思つていましがそれが実現したことは諸先輩のご指導の賜と只々感謝しています。今日の世相として身近に見た老人の姿を見てふと昔読んだ檀山節考を思い浮べその哀感を句にしたまでのことでもまさか賞を授かるとは意外です。これを機にますます斯道に精進したいものです。

49年度川柳塔賞受賞作

小出しする愛

円周をかけている



大阪府柏原市玉手町18の60 阪南グリーンハイツB16

小谷 葉子

川柳塔賞受賞作

小出しする愛

円周をかけている

川柳塔賞候補作品

戸田 古方

柏原市 小 谷 葉 子

同準優秀作第一席

春闘の夫を信じてみこもれり

岡山県 谷 川 渥 子

同準優秀作第二席

引金に指掛けたまま説く平和

羽曳野市 麻 野 幽 玄

推 薦 句

小出しする愛円周をかけている 小谷 葉子

小山内貞男

空の青とて童女の瞳には勝てぬ 秋田 茂

若宮 武雄

どなたにも交わすあいさつ森の道 山田スミ子

吉田落猿

アスファルトの割目雑草が枯れる秋 宮崎美津子

神夏磯道子

言葉にもいろんな温度ありました 岩本笑子

内藤ますえ

雑言を消して聞く耳を持ち 二人連れよけてよけてひとりの雑踏

神夏磯道子

略 歴

昭和四十一年かち不二田様に川柳の手ほどきを受ける。どんな句を作っても添削はされず、いろんな本を読まされる。川柳塔社勤務という最高の環境の中で、四十二年度の川柳塔賞準優秀作第二席になる。家庭は可動と二人。

ほんとうの愛を詠んだ句とはこれだと推薦しました。決して、駆けても円周を出ない。それが小出しであろうと、大出しであろうと。

(経過)

三人が三人とも文句なしに、これを川柳塔賞にしようということになりました。

準一「春闘」の句は最近の俳句にこうした傾向があるともいえますが「みこもれり」とことは結びついたとき、美しき夫婦愛をうまく表現していられます。

準二「引金」の句はすこし露骨すぎると思いますが、今の世界をすばり詠み上げていられます。

受賞作品は新人奨励を重点にして選考しました。

☆

橘 高 薫 風

推薦句

引金に指掛けたまま説く平和

麻野 幽玄

準優秀作第一席

娘三人嫁かぬ比べをする暮らし

大本 バット

準優秀作第二席

春闘の夫を信じてみごもれり

谷川 渥子

満ち足りて誰よりも酔いつぶれ

荒田 つる

云い負けて黙々と読む学術書

西本 保夫

東京へ電話かけいと云う手紙

真山 国彦

留守番へ働く者のぐちを云い

竹内花代子

記念撮影人間様を盛り合わせ

川上 富子

共稼ぎおかずの方が早よ帰る

岸本豊平次

五十坂天気夫人の名をもらい

吉田とんぼ

(評) 推薦句は、小国間の角逐を云うのか、

大国の威勢を詠んだのか、何れにしても不安

な現代の社会状況を揶揄している。しかも、

これは永遠につながる人間世界の命題なので

ある。準推薦句は、日本の軽佻浮薄な現実

を、女性ヤングを主題にして活写出来た。常

々表現力に優れた句を見せられる作家であ

る。春闘の句も、内容、句格は前二者に劣ら

ぬ佳句だが、俳句に類想が散見せられるとこ

ろ、マイナスに感じだ。

恩師会うたに細君元氣かね

山根 白星

病むはかなし指をまさぐるだけの恋

三宅 不朽

は、それぞれ同人になった作家、すでに受

賞した作家として対象から外したが、屢々佳

句を提出された才能に敬意を表する。

☆

まだ先が見たい老眼鏡を拭く

大林曲ん手

老いの旅方向音痴の妻連れて

池田秀珠夫

プラットでほんととした手も振られてる

岸本豊平次

落ちつかぬ花むこ様をたしなめる

竹内花代子

恩師会うたに妻君元氣かね

山根 白星

振り返る度に角度の変る墓碑

麻野 幽玄

小出しする愛円周をかけている

小谷 葉子

大 坂 形 水

まだ先が見たい老眼鏡を拭く

大林曲ん手

老いの旅方向音痴の妻連れて

池田秀珠夫

プラットでほんととした手も振られてる

岸本豊平次

落ちつかぬ花むこ様をたしなめる

竹内花代子

恩師会うたに妻君元氣かね

山根 白星

振り返る度に角度の変る墓碑

麻野 幽玄

小出しする愛円周をかけている

小谷 葉子

春闘の夫を信じてみごもれり

谷川 澄子

準優秀作第一席

三宅 不朽

鮑研ぐ身ぬちに泉湧くごとし

三宅 不朽

推 薦 作

三宅 不朽

太古から楽譜は変えず波の音

秋月 宏方

古来、詩歌等にも多く採り上げられていた

る、"波の音"という古川柳にもあるテーマ

を、"楽譜"という言葉によって現代化した

妙味。現代性あるスケールの大きい作品。

波の音が遠く、宇宙の鼓動のように聞えて

くる。

この作品を川柳塔賞に推したが、作者は川

柳雑誌時代からの"同舟近詠"の大家であ

り、いまさら"新人賞"でもあるまいと云う

他の委員からの説もあって今回は見送ること

にした。

幸 運 の 年

川柳塔社に勤務している以上、大賞はい

ただけなものと思っていました。ところが

が常任理事会の翌日、不二田様から川柳塔

賞になったと聞かされましたが、何かピン

ときませんでした。

あ の 作 品 は、東野大八先生と不二田様が

社の向いのうどん屋で雑談数時間中、私も

同席を許されました、その時、大八先生が

私に「愛情は一度に出さず、小出しにする

ものだよ」と教えていたとき、それをその

まま句にしたものでした。

二 賞 余 話

今年の二賞予想は第一位から六位までビタ

リ当たった。こんなことはじめてのことだ。

同人句集の予選を春日(しゅんじつ)氏に

依頼され18句を僭越ながらやらせていた

た。18句お送りしたら折り返し「楢山」の句

を追加してくれとのことだった。秀句鑑賞に

はいたたのである。そこで最後の句と入れ替

えたのだが、その時からこの「楢山」の句が

頭に残っていた。

春日さん おめでとうございます。

葉子さんが書いてるように「小出し」の

句は大八先生からのヒントである。彼女には

いつも人の話を盗めと云っていた。(不)



49年度二賞発表句会と同人総会

— 川柳塔社主催 —

日時 昭和49年10月6日（日）午後1時開場

会場 大阪府教育会館新館四階大ホール

（天王寺区東高津町12-2・但し上本町6丁目交差点東北百米）

— 電話 761-7066・7050番 —

▼同人総会は午後2時〜3時30分。（同人総会の案内状は出しませんが出席者によって議題を採決させていただきます）

— 同人総会の会場は三階ホールです。

式次第—司会・西尾榮—開会の辞・川村好郎—挨拶と経過報告および本年度事業報告・中島生々庵—会計報告と質疑応答・若本多久志—閉会の辞・菊沢小松園—
▼懇親宴は同会場で4時〜5時（会費千円）同人以外の方でもご参加ください。

▼二賞発表句会は5時30分から（会場は四階大ホール）

柳話

中島生々庵

— 本社会部幹事表彰

— 各地指導者表彰

— 路郎賞・川柳塔賞受賞者表彰

兼題

「世話役」

伊藤茶仏 選

「栗」

小西無鬼 選

「酒豪」

浜田久米雄 選

「文学碑」

尼緑之助 選

席題

（選者は浜野奇童・山内静水・臼井三林坊）なおこのほかに表彰をうける人（岡崎祥月・藤井明朗）

会費

五百円

— 開会9時—（投句料百円）
（宿泊などのご相談は本社板尾岳人までご連絡ください）

通信

A 市川鱗魚

御社の同人句集「川柳塔」内容を盛るための苦勞が見えていますが、長い間の編集が知らず知らずの内に出てくるのでしょう。
東野大八さんもほめていました。あの人はあまり人をほめないのに……。心にくい程の出来栄です。川柳塔の輪（和）が一見できて心愉快です。

B 池口吞歩

— 前略—多久志氏の「白楽天の詩作に思う」は、もう大分以前からさんざ議論もさらされて「革新派」と雖も耳にタコが出来くるくらい聞かされた事なのでしょうが。結局は伝統と革新の体質の違いで—中略—それにしても白楽天とか谷崎とか。権威あるものを示された事は。それなりに説得力もあり。我々後学大いに裨益させてくれた次第です。—後略—

台風16号、18号お見舞い。

被害地域の方々に謹んでお見舞い申しあげます。

各地から「無事」というお便りをいただいておりますが、家根瓦などの飛んだお宅があったそうでした。

川柳塔社



川村好郎選

子なき妻 夫をひとりじめ三十年 堺市堀畑 日々子

若く逝きあととりもなし御先祖さま
犬と鵬鵲逝きし主を知りもせず

退院を待ちわびていたに早や初七日

島根県 松本 文子

病棟のここにはこの朝がくる

老醜をそつと私に当てはめる

雲七重哀しいことが多すぎる

不幸続きカーテンの色剥げる

和歌山市 井上 マサ子

天職ときめたペンだこしかと見る

真っ直な視線で愛をたしかめる

すがりたい心むらさきの花を分け

さよならが鮮かすぎて思慕つのも

米子市 佐伯 越子

童心に返す故郷は過疎の村

過疎の里旧家の蔵もはげかかり

ささやかな不満もあって家平和
過疎の村水車うつろに音を立て

和歌山市 吉野 富江
櫓まかせの人生嵐に逆らわず
断ち鉄一つにすがる母子家庭

馬鹿になればかになるなと子に教え

冷汗を暑さのせいにして拭い

スランプも良きライバルに刺激され

和歌山市 内芝 としよ

果立ち行く子へ絵日記の頃想う

あれだけの苦勞を背負った顔でなし

競い咲く花へ鉄を入れしぶる

柏原市 小谷 葉子

弁解はよそう薄い胸の中

病葉を残して心変りのゆるし乞う

ひとえ帶たたみあなたの視野の中

磨くほど亡父に逢えるのか墓石

羽咋市 三宅 ろ亭

ゴーイングマイウェー蟻の木をつたい
知ったかぶり盲点衝かれて黙り
夏雲の千切れへ思念通わせる

和歌山市 秋 月 宏 方

子に自慢する何物もない父で
贅沢になったものだと思ひ
一字位読めるのもある書道展

岡山県 白 岩 文 衛

まだ来ぬは賛成票の数へ入れ
五十年一つの顔で足りた幸
口下手を人が謙虚と思ひ込み

新潟県 高 野 不 二

凍結も解除も価格上るだけ
実力をおぎなう金の使ひよう

いか釣舟便乗

素人に釣られるいかがいてうれし

備前市 武 内 雅 堂

みの虫の生涯孤独かも知れず
工場の橋に暮しの詩がある
新婚の鼻の汗きれいだなと思ひ

島根県 谷 岡 芳 枝

太陽の季節へ雲の横車
弱いと思わずさする風当り
暮思いつめ 思いつめ

和歌山市 檜 村 ふ み よ

汗をふくひまもあたえぬインタビュー
ゴキブリにほんろうされた蠅たたき
旅の留守張り合いの無い箸を取り

大阪市 稲 本 凡 子

貸した金取れず借りた金の日が迫り
好きな事出来ると一人居羨やまれ
倅せは二十四時間早すぎて

豊中市 安 藤 寿 美 子

わが庵は蟬鳩仔犬におこされる
夏バテの私にすぎる仔犬の瞳
精一杯今日も生きるぞ朝顔よ

大阪市 神 夏 磯 道 子

定価など覚えるひまのない値上げ
さりげなく恩を着せてる親のエゴ
波のないくらし退屈と思う日も

大阪市 小 谷 清 女

ままならぬ長雨逆うすべもなし
血圧のいたずら一足早い秋
生きている証抱痛いとこだらけ

和歌山市 若 宮 武 雄

スムーズに済んで印象呆けている
執念の根 巖のきずを見逃さず
執念の模索 人から遠ざかる

島根県 穴 戸 千 草

穂ばらみの稲をいとしいものに見る

うまい草 より分ける牛を侮れず
真相に遠い世評に泣く女

岸和田市 池田 露子

平凡という仕合せを噛みしめる

仕合せにすると言うたといびられる

口下手の相手信じて欺される

鳥取市 松本 永治

落選を知らぬボスターが笑うてる

孫の名も添えて手紙を娘が寄越し

補償額増えて立ち退く腹を決め

大阪市 内藤 ますえ

子には子のルール成程なと思ひ

ワンマンのように通ったダンブカー

対話するゆとりへもどるヘルメット

大阪市 須浦 つね

逝きしより三年たつに暑中御見舞

仏前に酒 気安めと知りながら

洗剤で洗って造花返り咲き

高槻市 竹内 花代子

一匹の蟬へ団地の子がさわぐ

店じまいなぞと上手に荷をさばき

逢う人もないのか昼も寝てござる

吹田市 藤原 世史春

エレベーターの静かに閉まる愛想なさ

サーピスはいつか流行った言葉です

クッシャミのこの時ばかり我が天下

堺市 堀畑 奴風

遺句

過去を消し無垢でありたい罪多し

万緑の公園身まで染まりそう

大阪市 堀口 欣一

あの家にもこの家にも二十四の娘

中空に人生賭けて電気工

守口市 岸本 豊平次

故郷の風が帰省の足を引く

敗けているナイターチャンネル子へ素直

寝屋川市 江口 度

お隣のクーラーの音大きすぎ

大企業へ公約果す値上げ劇

大阪市 新川 貞祐

うらぶれてからも得意の頃の夢

待つことに居眠ることに馴れ老ゆる

今治市 渡辺 伊津志

綴り方母が気にするところが丸

眼の線を合わせて妻の聞き上手

尼崎市 小林 文月

兄の死(二句)

兄上は寝棺の中で暑かろう

兄の計に電話連絡一つ洩れ

青森県 荒田 つる

ハイハイと言えはすむとは知りながら
居眠りが特技となつて更年期

寝屋川市 福 富 隆 子

土佐行

知る人も減り故郷の地図変る

お土産の土佐の香りの持ち重り

和歌山市 山 本 知 也

流暢に輸入タレント稼ぎ上げ

寵愛を受けてぬかづけ色がよく

八戸市 安 田 勝 己

ねぶた悲し観光用の派手にゆれ

懇親会出れば是々非々の顔になり

東大阪市 崎 山 美 子

足腰は老いても意地悪さえている

ひざ許に居る幸せを忘れてる

大阪市 秋 田 茂

子捨ての世カラスかわい子育て

くませみをとらえてみればお盆なり

鳥取県 福 田 陽 山

長命が亡妻待たせ盆迎え

無き友を偲んで淋しい酒を汲み

鳥取県 加 藤 茶 人

見込まれて支えきれない荷を背負い

友情を支える貸し借りのないお金

鳥取県 伊 藤 静 枝

同窓会これを機会に派手を着る

盆の客去りし夕の空しさよ

倉敷市 高 山 みどり

墓掃除終つて読経山の朝

もう幾人ふえるか知れぬすしを巻く

新潟県 栗 和 田 清 子

三十年振り旧友と会う

再会で昔の序列再現し

電話して三十年の握手する

岸和田市 池 田 香 珠 夫

母と子が涙で父を呼ぶテレビ

たしなみにしても見過ぎるコンパクト

鳥取市 大 塚 豊 生

定年へまだこれからという職を選び

老夫婦ヘルパーさんの手は借りず

青森県 波 田 ただ お

天気予報雨がやたらに的中し

海水浴ママが子供に手を引かれ

鳥根県 岩 田 三 和

みのる穂の頭は低く腰強く

福の神今日も庭先き通りすぎ

橿原市 西 本 保 夫

淡々と書くやましきの無い手紙

ごますりもへつらいもせず出世せず

新見市 吉 田 落 猿

朝顔の数ほめ合うてご挨拶
宿命の苦勞背負うて地に還る

弘前市 小山内 貞 男

赤字とは別に歳費の値上げ案
ある日ふと水の流れにあせり見る

大阪市 平 井 露 芳

絵日記にトンボ一匹飛んでいた
カメラだけ残りポーナスみんな消え

兵庫県 高 橋 近 江

暎しませ三十五年を赤信女
断絶に風穴明けるニュース聞く

滋賀県 柚 木 踏 草

旅なれて地蔵の顔もみな違う
証人の忘れた糸をたぐらせる

鳥取市 岸 本 無 人

買いだめの利得主婦は見直され
弱つてる金魚夜店で掬わせる

出雲市 谷 口 あきら

見る人も無いに山百合清く咲き
菩薩像俺の心にきざんどく

今治市 大 本 バ ッ ト

鉢巻の強訴で米の値が上がり
心臓が動く間は注射をし

今治市 伊 藤 一 郎

一と区切りつくと耳が痒くなり

責任は負う決心の勇み足

宝塚市 吉 田 とんぼ

黙禱へピッタリ止んだ蟬しぐれ
身がまえた次の言葉が気落ちさせ

岡山県 長 尾 保

汗知らぬ儲けた人生狂いかけ
豊かなる妻のいびきに寝つかれず

松江市 梅 本 登 美 也

さまようてみようか巷は秋となり
お経あげてもらって心の窓がはれ

泉佐野市 大 工 静 子

風鈴鳴る花に無情の風ながら
せせらぎに今日一日の泥おとす

高知市 古 谷 恭 一

銀行を出てから誰も信じない
出稼ぎの眼に夏草が伸びてくる

松江市 岡 崎 雪 美

トルコ嬢汗を流して汗を出し
草市の高値それでも客は寄り

高槻市 山 田 スミ子

うかつにも気を許したで笑われる
長男の相談やっぱり金が要り

須賀川市 平 栗 金 太 郎

口先きの真実一路に騙されず
一茶なら命乞いする蠅ならん

大石をすすめる売り喋らない
大阪市 大 国 たかし
丹精の茄子が鮮やか露光る
島根県 飯 塚 虎 秋

早々に妥協するのも老の所為
鳥取県 林 露 杖
忠実に務めへんくつ者にされ
伊丹市 檜 谷 漫 柳

口先きの抵抗肚までよう見せず
河内長野市 井 上 喜 醉
勝った日はスポーツニュースで反芻し
出雲市 藤 井 晴 月

蟬の声静かな里に夏を知る
堺市 栗 本 藤 持
優しさは時に表裏の声となる
富田林市 奥 井 春 子

我が父を奪った酒です遠慮する
八戸市 島 田 昭 治
目にしみるカンナの赤は平和の灯
大阪市 横 地 正 彰

益軒訓守らなくても達者です
姫路市 大 原 葉 香
すり切れたGパンこれも得意らし
尼崎市 中 谷 利 美

鬼瓦明治の顔でまだ元氣
和歌山市 沢 山 福 水
年上の部下を叱るに気が疲れ
赤穂市 谷 口 赤 童

狂うだけ狂え粥なとすらんか
尼崎市 大 垣 たもつ
大学を出た百姓は落ち付かず
名古屋市 吉 田 文 枝

ラーメンの中で国産葱ひとり
今治市 真 山 国 彦
ベッタラ一本三百円を二度も訊き
大阪市 坂 本 喜 洸

クジ付きで集めて貸して儲ける氣
今治市 今 井 松 花
七色に希望を賭けて明日生く
大阪市 花 田 繁 子

Gパンの便利男女で共用し
米子市 江 原 良 二
おしゃべりが何よりご馳走と云うお客
大阪市 村 島 秀 村

時刻表めくって旅の夢を追ひ
鳥取市 勝 山 紫 宏
おみこしの通りし後の静けさよ
岡山県 西 田 溥 子

ある時の情性は革命待ちわびる
岡山県 西 田 溥 子

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし

小浜 牧人

句を詠むうゑに於て、自分をすぐ出しては感銘が浅い、そこで何かをもつてきて、自分の心境、思想、感懐、をのべるものである。この句、あの勤勉な蟻の動作をもつてきて、句主の感懐を托されたこと、洵に適切で、すらすたと、嫌味のない詠みぶりは流石老巧と敬服する。

水を得た魚思わす退社時

傍 島 静 馬

素晴らしい比喩に成功された句。バタバタと机の上を片づける音が、手にとるようにきこえてくる。僕も公務員時代、五分前になれば手を洗いに行つて、ジャンツウの姿勢で、机

の前に座っていた時代を思い出した。

こんな時の私が嫌いで顔洗う

岩 田 美 代

この作者の句には、何時も、うまいなあと感じず。世の中で何が嫌いかと訊ねられたら、自分の心という返答をする人が沢山あるだろう、僕もその一人である。或る時の自分の心のなんと情なく嫌なことが、バカバカと大きな声で、どなりたいときもある。句主は、どならず、実際に顔を洗われたのである。そうしたら、少しでも、こんな時の嫌いな私の心が拭えるかと思つて、座五に顔洗うという実動をもつてこられたところ、洵に感銘が深い。

作家の妻いつも背中へ話しかけ

不二田 一三夫

人生の哀歓をほしきままに、ペンを走らす作家であっても、家にあっては小説の主人公と似ても似つかぬ生懸をするものらしい。

ユーモア作家は、反対に家の中では何時も苦虫を噛んだような顔をしているというところをきいている。漱石は、奥さんに木片と小刀を渡して小細工なら、之でせよと言つたらしい。

背中へ話しかける奥さん、背中で返事される

る奥さん、奥さん大変ですねと言えば、もうとつくにあきらめていますという言葉が返ってきてさうである。

焼鳥屋表の方へ煽ぎ出し

遠 山 可 住

なる程、その通りだったなあと言う句であるが、表の方へ煽ぎ出し、は焼鳥のあの香ばしい良い匂いをコマーシャルする一つの動作が、焼鳥屋のおっさんの中腰が、まことに川柳らしい。川柳はどこにでも落ちてゐる、だが、こういう風に上手に拾わねばならない。可住さんは、気どらない好作家であり、名吟の数々を吐いていられる、流石無鬼先生の高弟である。

乾杯はビールの量を比べてる

宮 川 珠 笑

それでは、ご指命によりましてと乾杯の音頭取が、長々と挨拶する馬鹿が時々居るが、その間捧げたグラスのビールの泡が段々きえて、七分から半分位になつてくるときがある、その時、お隣りはどうかと比べてみると、矢張り六分ほどに減つてゐる。末席では、手がだるくなつたなあとぼやいてゐる奴がいる。黙つてビールの量を比べてる——珠笑さんらしい、姿勢である、ユーモアな佳句である。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

橘高薫風

八月二十八日川柳塔九月号発送の予定日である。朝起きると胃痛、押して社へ出る。座撃いよいよ激し。近くの医師に注射をして貰って天笑君の自動車で帰る。翌日、厚生年金病院へ。即日入院。精密検査のため。九月号水煙抄を読む。誰にも作れる句よりも、自身を詠ったこの号では、秋田茂氏と、小谷葉子さんの句に魅かれたのは、私の感情が激していたからだろうか。

同じ世を楽観論と悲観論

樫村ふみよ

同じ世に同じ人間として生れて来ても性格境遇の差が万別の人生模様を作る。この作者は楽観的な方らしく、「すきだらけの家で笑いももれやすく」の句もある。

わからない読めないサインしてもらい

内芝としよ

スターのサインは事実短時間に多数のファ

ンの要望を満たさねばならぬこととて甚だ乱雑になぐり書きする。「わからない読めない」と強調した所以も判るのである。

クッシャミを仕損なったり蠅が来て

藤原世史春

嚏が出そうになったところへ蠅奴が飛来して眼前にとまりおった。息を整え蠅叩きで一撃を加える。蠅は仕止めたが、鼻の奥にくさめの臭が残る。

朝の靴働く方へ向けてある

大林曲ん手

主人のご出勤である。磨きのかかった靴が揃えてある。七人の敵の中へ出撃する男の意志を示すような「働く方へ」の措辞はうまい。

珍客の手持ち無沙汰が子をほめる

内藤ますえ

珍客のご入来とてママは早速ご馳走にとりかかる。客は幼児相手に「お齡はいくつ。」などと手持ち無沙汰と愛想との入りまじった感情で相手になる。軽いスケッチだが面白い味が出ている。

診察の途中で票を頼まれる

真山国彦

ありきたりの選挙戦での情景だが、「診察の途中で」がこの句のアクセントになっている。大袈裟に云うと生命を預けている先生からの申し出であるところ、老獪な医師の依

頼の仕方などの想像も出来るのである。はったりの髭消えていた戦友会

横地正彰

軍隊の權威をバックにしていた人間の髭はどおろかしくナンセンスなものはない。

一人の人間になった時、髭は剃り落してさばさばしたくなった。それで戦友会で心から笑い合えるのである。

ついで参り叱りはしまい亡母の墓

吉田とんぼ

平素気にはなりながら果せないのが墓参である。所用で近くまで来たので、ついで参りをさせて貰った。「叱りはしまい」の表現に母に甘える心情がよく出ていて暖かな句である。

待たされて死亡欄まで目を通し

樫谷漫柳

応接間であらうか。診察の待合室であらうか。長い間待たされる。傍の新聞を手にして目を通す。詳しく読む。死亡欄まで読んだのだというのだ。死亡欄が適切だった。

看護婦として抜群衆として足りず

安田勝己

看護婦としての技術抜群に秀れている妻ではあるが、家庭の妻としての采配はうまいと云えぬ。職業と家庭を両立させるむずかしさ、性格の長所短所のある人間を表現出来ている。

百人一首と川柳 (4)

富士野鞍馬

奥山は猿丸堂と知ったふり

松籟 (一一三六)

また文句取りに

紅葉ふみわけぐんにやりと鹿の尿

正 (八六六)

という葛飾北斎の句もある。

ところが、猿丸太夫は、聖徳太子の孫弓削王の別名という説があり、それが弓削道鏡の別名という俗説となり、その巨根を詠んだ句もある。

百人一首でかいへのこも一本あり

琴亭 (一五四)

名は猿で馬のようなへ勅使たち

雪下 (四二三四)

猿丸へ勅諭もつと奥山の

巨眼 (二八二七)

一称徳女帝ご寵愛

とんだかたわは奥山と花の色

(二八三五)

五人目は図なし九人目は穴なし

(天六十一・一五)

一花の色も穴なしも小町

猿丸はサルマロと読むべきであろうが、後世サルマルと読む人が多い。

六 中納言家持

五 猿丸太夫

おくやまに紅葉ふみわけ鳴く鹿の

声きく時ぞ秋はかなしき (古今集)

この歌は「古今集」に「説人知らず」としてあって、猿丸太夫の作であるという証拠はない。これを定家が、猿丸太夫の作としたのは、当時そういう伝説があったのであろう。

「続日本書紀」に

「和同元年(七〇八) 従四位下柿本朝臣佐留卒」

とあるのが、猿丸太夫の本名だと伝えられている。その当時「大夫」とは、五位の官人の略称であった。

猿丸太夫は、聖徳太子の孫であったが、王族生活をきらって、諸国を旅し、民情を見聞

し、これを上に伝え、民衆の立場を尊重した。文学と和歌を口伝えに説き、宇治田原の山奥で、名歌を残して死んだといわれている。

藤原公任(五五) 撰の三十六歌仙にも、

遠近のたつきも知らぬ山中に

覚束なくも呼子鳥かな

猿丸太夫

が入選しているの、川柳は、

百首でも歌仙でも猿山の中

斗丸(三五三二)

歌仙でも百でも猿は山の中

池茂(九一四)

と詠んでいる。また前が赤人であるから、

赤人の尻に猿丸きつい事

三松(四四四)

と詠み、浅草の奥山にかけて、

かささぎの渡せる橋におく霜の
白きを見れば夜ぞふけにける

(新古今集)

この歌の文句を取って川柳は、

ふる雪の白きを見せぬ日本橋

(宝七・25)

おく霜の白きは見せぬ日本橋

錦糸(一四〇二)

と、江戸日本橋の賑やかさを詠み、

白きを見れば夜ぞ更る紋日也

三交(二九一七)

と戯作されている。

八潮や白きを見れば夜ぞ更ける

錦鳥(四九二八)

と、吉原八潮の遊女の白無垢姿を詠んでいる。

また家持の名を、

百人のうちに大屋は一人也

袂衣(ヨリ三三)

家持をいえもちと読む大屋の子

〇キ(一四〇一)

中納言いへ持とよむしん大家

マイタ(五五五)

鈴 虫

麻 生 蔑 乃

今日珍らしく戸田古方様がお越し
になり、手ずからお造りになった句
集を頂きました。自画自筆のたぐい
稀れな句集でございました。今日は
東大阪市の句会へ行くと云うていら
れました。

私も仕事がかたづき次第ゆっくり
拝見したいと思っています。きつと

古方さんらしい特色のある句が沢山
にあるだろうと、楽しみにしていま
す。南海の句報お送りいたします、
よろしく。

去年の鈴虫の卵が箱の中で孵化し
てお台所の机の下で涼しい声をはり
あげています。

(八月二十四日)

鈴虫が鳴いて風鈴忘れられ

蔑 乃

夢が広がるシヨッピング
近鉄がお届けします



 **近鉄**

大伴家持は、大納言旅人の子で、叔母の坂上節女も歌人であったから、幼少の頃から詩歌の雰囲気の中で育ったので、大伴氏の長者としてよりも歌人としての方が、有名に伝えられている。そして有名な「万葉集」の編者である。越中守であったが中納言となり、昇進して持節征夷將軍となった。そして延暦四年(七八五)六十八才で終っている。
越中守の由緒によって、今氷見市に「かささぎ」という名菓がある。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四九年六月号
至 四九年八月号

路郎賞候補作品(到着順)

正本水客

一〇円の葉書大層なことを書き 村上 春巳
地下鉄とバスは只です寝たつきり 金井文秋
末弟に親を見させて名士なり 鈴木村諷子

作州大原

菜の花を武蔵が切れば蝶となり 香川 酔々
面当てに娘は阿呆を連れて逃げ 若柳 潮花
寝ころべば母の膝かも知れぬ峰 板尾 岳人
山火事の跡の広さを見る車窓 大江 秋月
誰にでも似ている顔で孫生まれ 室谷 徹舟
早寝早起き 一寸反発したくなる

一日が大切と知る病むベッド 大坂 形水
膝坊子 砲列敷いてお茶の席 山田 季賛
遠くより塔は折りの如く見え 福井野迷路
西 いわを

☆

川村好郎

心に棲む母性に負けて春に閉ず 河野 君子
廻り道廻り道して女ごころかも 宮西 弥生
自慰と自嘲とが大声で唄う 本田恵二朗
年よりが動きすぎるのにも困り 傍島 静馬
おろかにも流れる水を呼びもどし

蝶がいて石に老若男女あり 久米奈良子
哀しみと隣り合わせの強さなり 橘高 薫風
会者常離出遇いのあとの悟りとも 小野 克枝

☆

若水多久志

響かない鐘撞いている宵である 野村太茂津
売れ残ったらどこへ行くのか甲虫 八木 千代
谷垣史好

生き抜いて流転の風を聞くばかり 羽原静歩
空の青貧しきことは思うまい 小出 智子
心に棲む母性に負けて春に閉ず 河野 君子
春愁や粉おしろいの独りごと 高橋 夕花
夫婦もう接合剤が効かぬ仲 市場没食子
憎しみもないのに蠅が叩かれる 河股 緑水
つり皮へ皆んな何かに耐えている 岩田美代

☆

北川春果

灰色に女包んで尼の春 仲どんたく
一粒の種太陽は見逃がさず 本田恵二朗
秋を着て女の線に素直なり 錦織 文子
忘却の流れに亡妻が溺れそう 稲田 豊作
反省がこんなきれいな朝にする 能登原白水

身勝手な奴だ補聴器外しとる 松下 梁水
こっちの水は甘いから孫が来る 金井 文秋
味気なく下戸と花見をして帰り 葛城伊三郎
改札が二人揃うてアクビした 戸田 古方
米を買う紙幣はこんなに疲れ果て

不二田一三夫

増築をするほど歯医者へ持って行き

おとなしい方と仲人四捨五入 平田 実男
宿浴衣ちよつびりハイドの貌となる 福井野迷路
叔母逝きぬ戦後にくれた芋のこと 川口 弘生

遠足が来たので鐘も嬉しそう 仲どんたく
谷 のぶお

☆

西尾 栞

春の宵お前理屈が多すぎる
 全身で登る断崖蟻が這う
 花の種まいて尼僧の窓埋すむ
 人前で鼻毛抜くほど金が出来
 渦潮のここが見せ場とかもめ舞う

雲は挽歌雲は新生恩師の忌
 老い呆けになりそう正座崩されず
 橘高 薫風

保護色の中で虜になっている
 堀江 正朗

小出 智子

調子よい話は金の差で負ける
 藤井 明朗

小浜 牧人

◎生きてゆく蟻に日向も蔭もなし
 ◎作家の妻いつも背中へ話しかけ
 不二田一三夫

☆

菊沢 小松園

琴の音にのる時落花蝶となる
 河内 天笑

点 点 線 線になるのを好まない
 山川 阿茶

かあさんの墓 かあさんのいるぬくみ
 宮口 笛生

人妻へドラマはあはな知恵をつけ
 本多 柳志

いつまでも敗者でおれぬ矢をつがえ

一と粒の種太陽は見逃さず
 森居 青居

積み上げた心の積木くずすまい
 本田恵二朗

移り行く世相にうとく広辞苑
 飛田 好一

耳を閉ざせ風は言葉をつくるから
 本多 柳志

石だたみの余韻 歴史が通り過ぎ
 関 美子

川柳塔賞候補作品

橘高 薫風

ゆく春を惜しむか水の落ちる音
 槻谷 一葉

濁る世へ今年も桜花をつけ
 三宅 ろ亭

弱みそを売り物にして古稀迎え
 安藤寿美子

春闘の夫を信じてみごもれり
 谷川 渥子

ブラットではっとした手も振られてる
 岸本豊平次

旅のひと太い絆をおいて行き
 小谷 葉子

さくらんぼつまんだ指に魅せられる
 仲原 己恭

紙バッグ旅を気軽うもちかえり
 大原 葉香

姑がもつと切れたす鉄です
 岡 英好

政治貧困モノリザですり替える
 鍋谷 忠男

☆

大坂 形水

洗濯機疑惑の泡が盛り上がる
 松本 文子

支柱欲し欲しいと胡瓜はい回り

丸すぎて置かれたとこへ落ち付けず
 三宅 ろ亭

店仕舞いする魚屋に母を見る
 若宮 武雄

ブラットではっとした手も振られてる
 岡 英好

いつも嘆いている僕のキリスト
 岸本豊平次

小出しする愛田周をかけている
 秋田 茂

振り返る度に角度の変わる墓碑
 小谷 葉子

春闘の夫を信じてみごもれり
 麻野 幽玄

太古から楽譜は変えず波の音
 谷川 渥子

☆ 戸田 古方

小出しする愛田周をかけている
 小谷 葉子

どなたにも交すあいさつ森の道
 吉田 落猿

足を知る分源泉で差引かれ
 麻野 幽玄

張りつめた糸を誰かに切ってほし
 槻谷 一葉

子の息に親の息足すゴム風船
 梅本登美也

だかららの一日欲しいという暮らし
 若宮 武雄

空の青とて童女の瞳に勝てぬ
 秋田 茂

充ち足りて共産主義をやめたよう
 小山内貞男

無駄使いして思い出にのこる旅
 中谷 利美

口あけて腹を見られた馬鹿蛙
 池本 生

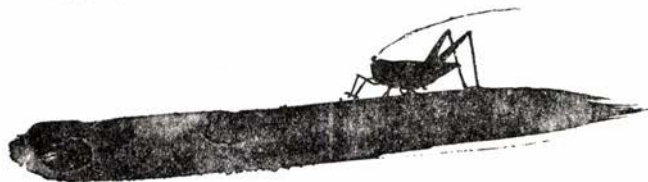
次回中間発表は50年1月号・5月号・9月号の予定です。

編集部

路郎賞作家と川柳塔賞作家が

語る思い出のかずかず……

二賞作家こんにちわ



昭和41年度路郎賞（第1回）

内職に

藤色がある

たのしさよ

大阪府 内藤 きさ子

（休会中）

昭和42年度路郎賞（第2回）

身よりなき老婆

いくさのことにふれ

句の中に喜怒哀楽を表現する場合即ち喜・怒・悲・美・淋・といった文字を避けな
いと句の価値は半減すると思う。よい句と
は読者の想像の場面に無限に展開されるこ
とでしょうか。

鳥取県 森 田 布 堂

昭和42年度川柳塔賞（第1回）

雲の峰

あるけばあるくほどひとり

夢よもう一度と思っている。

雲の峰の毅然と湧き立つ路郎忌のある限
り、受賞の一語「つづけていてよかった」
を噛みしめ、詩を情を喚起されていくであ
ろう。

広島県 三 宅 不 朽

昭和43年度路郎賞（第3回）

似て居ない

父に足音だけが似る

師の解で十七文字が光って来。そこでこの俺も満更でないなと思う。ところが貫禄が足らず上座は肩が凝り。で——自惚をかなぐり捨てて出直す気。と云う次第です。

岡山県 木山 遠二

昭和43年度川柳塔賞（第2回）

消えるから

雪は刹那を淨く舞い

受賞して早や六年の歳月を経ました。発想の時点では嘘はなかったが、美しくありたい作意が句にする過程に於いて表れた。「刹那」「淨く」「舞い」に銜いがある。

大阪府 高杉 鬼遊

昭和44年度路郎賞（第4回）

足跡を残そう

砂のある限り

人生は長いようで短いものだ。自分なりの足跡を鮮明に、確実に残し続けねばなるまい。それは前向きの姿勢で生き続けることであり、また生甲斐というものでもある。

岡山県 本田 恵二朗

昭和44年度川柳塔賞（第3回）

宝石の悲哀

永住権がなし

鳥根県 王

（退会） 紫

昭和45年度路郎賞（第5回）

握手した手が

離れないまま坐り

どこかで見た握手ぶりがふっと浮かび句にしたもので案外すらすたと作れたような気がする。片方が手を離したくても片方が離さないからそのまま坐った場合もあり得る。

岡山県 浜田 久米雄

昭和45年度川柳塔賞（第4回）

倅せな女に

ふだん着が似合う

思い出と云えば悲しいことが多い、そんな私に現在の生活は平凡であるが楽しく幸せである。老いてから振り返ることがあるとすればそれは素晴らしいものであると思う。

大阪府 小出 智子

昭和46年度路郎賞（第6回）

灯台の夕陽

神話を抱きよせる

その夏、景勝地日御碕で従兄弟会を開催した。東洋一と言われる灯台のすぐ隣が会場、眼下に渺茫たる日本海がある。ほどほどの酔眼に映った夕陽は限りなき感懐に誘われた。

島根県 尼 緑之助

昭和46年度川柳塔賞（第5回）

モナリザの笑いに

私も笑うてみる

今年、ついにモナリザ来日。この不思議な笑いに、魅せられた人も多いでしょう。笑いの奥にあるものは知るよしもありませんが、見る人がそれぞれに想像してみただけでも、楽しいではありませんか。

（旧姓・生信）

広島県 岩 本 笑子

昭和47年度路郎賞（第7回）

暎閉す

耐える苦痛が浅れぬよう

この年の一年前、緑之助先生から「次はあなたの番ですよ」と激励されましたが、それが夢でなかった感激は一生忘れ得ないことになると思います。

島根県 堀 江 正朗

昭和47年度川柳塔賞（第6回）

飾り壺

一枚さされた事もなし

今更この句の解釈は致しません、御自由にごうぞ。川柳も世の中と共に進んでこそ価値があり、人々の共感も得られ従って斯道の隆盛につながるのではないのでしょうか。

島根県 谷 岡 芳枝

昭和48年度路郎賞（第8回）

揚つても揚つても

雲雀に空がある

死ぬまで修業という言葉がある。奥へ進む程深く高く極致に到達する事は不可能である。人間の欲望も亦然りて無限の欲望を充たす事は出来ぬ。それでも雲雀は空に向って揚つてゆく。

兵庫県 小 浜 牧人

昭和48年度川柳塔賞（第7回）

めでためでたで

ひとり娘をもつてかれ

昨年は正朗、今年は私、二年連続で夫婦が入賞するなんて、こんな大きな喜びが私たちの生涯にあったことは川柳のお蔭だと思います。早く健康になりたいです。

島根県 堀 江 芳子

近 作

今治市 月 原 宵 明

敬華した友を偲べば天の川

仏壇も神棚もなくマイホーム

とまり木で非力を認め酔いつぶれ

大洲市 米 沢 曉 明

昼食をすませた嘘も零時半

この話乗って見るべし嫁きおくれ

弁解を聞けばなる程叱られず

岐阜市 市 川 鱗 魚

じいちゃんとじいちゃんがいて梅酒買う

過去語る父は妻の非など言わず
控え目にしとくもつまり意気地なし

東京都 池 口 吞 歩

五十面下げて浅学不肖なり

五十面下げて女房が怖くなり

五十面下げ人生で何だろう

今治市 長 野 文 庫

青空と水とをほめて軽蔑し

十八九食べても寝てもいい度胸

主流派の保護色を着てうまく生き

秋窓 2 題

森 田 布 堂

灯台の夕陽神話を抱きよせる 緑之助

この句の中には美も静寂も含まれてい
る。最後に俳聖の句

古池や蛙飛び込む水の音

よい句は恰も名曲を聞き終えたあとのすが
すがしき感じにも似ている。小説家村上浪
六は「すぐれた川柳は一卷の小説にもまさ
る」と言っている。

X

現在の短歌を省略して川柳にすれば一
層深みやうがちが出て立派な川柳になる
と思うのである。この故に川柳が高度の
文芸と言われるゆえんである。身よりな
き……の句を短歌では「墓石を洗う老婆
は身よりなくいかりを込めていくさを語
る」の省略である。

○棺が出たあとを夜長の虫が啼きこれ
を短歌では「棺が出たあとを淋しく秋の
虫夜長を啼いてわれは眠れず」（○印の
文字不要）

右いづれも川柳によって格調高い句に
なるのである。短歌における不要の字を
削り読者をして想像せしめるのである。

お 買 物 は
4 都 を 結 ぶ
大 丸 へ !



大阪・東京
大丸
京都・神戸

代打要員の

「秀句鑑賞」

—前月号の水煙抄から—

不二田 一三夫

薫風さんが前号発送の日（8月28日）本社でおれ（胆石？）入院された。責任感の強い人だから「秀句鑑賞」の原稿を病床で書くかも知れないが、締切りぎりぎりまで、そっとしておくつもりである。原稿がもしまに合えば、このピンチヒッターの原稿は、せっかく書いたのだから「秀句鑑賞」とは別に穴埋めに使うことにする。

銀河鉄道天国行きは座席指定です

秋田 茂

鑑賞としてペンをとるか、それとも批評として進めるか、と戸惑った。もちろん鑑賞批評というのでもあるにはあるが……。

鑑賞する側から云えば、常識を破った句のほうかたのしい。秀句鑑賞即二賞候補というパターンがあるが、中には「鑑賞」を主にしたものがあってもよいのではないか。

778というスタイルでは二賞候補には程遠いような気がした。

この句、説明はいらない。作者は柳屋こそ浅いが詩はすこし勉強したそうである。

復縁へ牽制球を投げてみる

吉野 富子

「牽制球」の狙いはストライクだ。阪急の福本へする牽制球は刺殺にあるが、この場合は相手方の気を引いてみるのだから、野球といえば打者が打ってくるが、もう一球待つ、かの掛け引きである。その心理作戦に、呈上へ遊びタコの牽制を送ったのである。この復縁は成就するだろう。

いつの間にか私も数字にされている

谷川 渥子

選挙ほか人間はよく数字にされる。拙作に「人間をみんな数字にしてはじき45・6」がある。人間を背番号制にした漫才台本を十数年前に書いたことがあった。子沢山の家庭や、学校など姓名を数字にしてしまえば便利この上もない。

クツシャミを仕損なったり蠅が来て

藤原世史春

ぼくも蠅は大きらいだ。路郎先生のお宅へ伺うと、かならず好物の甘い物を出してくださった。その日は羊かんだった。

「お茶もいれたから、さ、おたべなさい」と霞乃先生が、もじもじしているぼくをうながすように云われた。

「その羊かんに、いま蠅が止まりましたので

……」と申しあげたら。すぐ新しいのと取っかえてくださった。無礼ではあったが、家では蠅を見つけないとかならず殺すことにしていたのである。

この人も俳句歴は相当に古いが川柳では新人である。

出なかった蠅（くさめ）をぐっとこらえ、そおと蠅叩きをたぐり寄せ、発止と打ったまではよかったが、蠅は素早く逃げていた。かつて扇遊という落語家がこの蠅取りのユーモラスな仕草を売り物にしていたことがあつた。蠅も仕損ない、蠅も打ち損なつた。

人妻を狙えば銃が錆びてくる

武内 雅堂

「錆びてくる」で活字になった。でなかつたら没になつたかも知れない。

ぼくなら射ちたい。せめて句の上だけでもこのようなアバンチュールがしてみたい。新聞のコントには、こんなこと毎月平気で書いているが、さて川柳となるとそうはいかぬ。常識という筋が一本とおらないと見向きもされないところに、伝統川柳のなやみのようなものがあるのかも知れない。

つぎの分までスペースがない。（順不同）

墨のかび拭いて暑中見舞書く

吉田 落猿

待たされて死亡欄まで目を通し

樫谷 漫柳

子には子の器で水はこぼさせず

大林曲ん手

償いの果ての細いシルエット

小谷 葉子

路郎句碑建立25周年記念

第26回西日本川柳大会

島 居 百 酒

懸念していた台風18号のこともケロリと忘れて、倉敷、鷺羽山の観光を兼ねた第一班の一行男女廿五名、九月七日朝新大阪駅を出発。列車が走りだすやいなや早速笹子氏が持参のウイスキーで口火を切る。朝からの酒に酔の廻りは早く、浮かれ鳥が羽搏き初めるを、飛燕一翔あつと云う間に岡山着。

ここで松江の鶴丸氏と奇遇、渡りに舟と一行に迎え、駅前からの観光バスにホロ酔い機嫌の体を委ねる。開放感の浮き浮きムードにガイド嬢の説明もうわの空、囁く頭上へ青天の霹靂ガイド嬢の一喝。毒気を抜かれてしゅんとなる。だが海千山千の強者ども、早速この一喝を題にしての即吟をガイド嬢に献じて、ご機嫌をとり結ぶ手管、恐入った柳魂ではある。

大原美術館見学。鷺羽山スカイラインから鷺羽山に至り、天下の絶景を展望して玉野市渋川の玉野荘に入る。直ぐ裏は白砂青松、海は碧く澄んで波静か、点在する島々を縫って

指呼の間に四国が望める佳境である。

さて夜の本番。先ず予想外のご馳走が食い意地飲み意地の張った一行をご機嫌にする。食うほどに飲むほどに、後は常例通りの無礼講。宴果てた後もその余燼消えやらず延々と燵って談笑は夜半に至り、遂に他グループから今日二度目の一喝を喰う仕末。

短かい眠りから覚めると、愈々本旅行の本番弓削会場を目指す。疲れか寝不足かバス道中の暫くは静粛を保っていたが、いつしか又しても雑音。この調子では三度目の一喝を会場で喰らうだろうと他愛がない。到着した会場には第二班の直行組生々庵主幹、多久志副理事長他四名の顔が既に揃っていた。流石は川柳の町弓削の面目躍如として、駅前の路郎師の句碑に次いで、新築の公民館玄関前に立派な弓削平氏の句碑が建てられ、駅からの沿道各戸毎に「祝川柳大会」のピラを貼っての歓迎。柳人の誇りと喜びがこみ上げてくる。やがて開会。直原七面山氏の堂に入った司

会のもとに、浜野奇童氏の開会の挨拶から始まって、愈々入選句の発表。選者が登壇する毎に、七面山氏のインタヴューがあつて入選句への期待を盛り上げる。席題から兼題への披露に挿入での川村好郎師の定評ある柳話是一段と冴えて満場の喝采を博した。

兼題の仕上げは生々庵主幹のユーモアを含んだ披露で結び、大会の掉尾を飾る特別課題「雲」の披露は、葎乃先生がご老令で出席をご遠慮されたので、先生の選句を葉副主幹が代理で例の瓏々たる音声で詠み上げて、最後の締括りをされた。閉会の辞の終る最後まで留まって有終を全うしたかったが、発車時間の関係で心ならずも中途退場したのが惜しまれる。

席題「出発」に阿部柳太氏の入賞句は「出発にこけしのように立つ女」

兼題「広場」に高杉鬼遊氏の天位入賞句は「号令を聞く広場ならもういらぬ」

減らず口の話題に出た三度目の一喝は、天位入賞二人への喝采に転じて、辛うじて大阪組の面目を保ち得たことをせめてもの収獲として、想い出に残る旅を閉じた。

葎乃先生選の特別課題「雲」の天位は池田太郎氏の

「雲有情明日の糧のとほしきに」

野田素身郎選

特訓の汗で掴んだ優勝旗
 選手への階段坐陣の味も知る
 女子選手負けても勝った泣いている
 大選手人種差別を跳ね返し
 食欲で選手の調子判る母
 両親が選手で幼児から鍛え
 ママ選手家事も夫が応援し
 同走の選手がみんな強く見え
 片当で足らぬ選手の腹が鳴り
 青春の総てを選べたユニホーム
 柔道部の主将と分る肩の肉
 薄幸にめげず選手は車椅子
 国境を越えて選手は手をつなぎ
 表彰台眼下の禿とする握手
 捲土重来砂を土産の甲子園
 控えめな選手インタビュー
 人生の何かをつかんでいた選手
 豆選手がもう一番をつけたがり
 先輩がジュニアを運ぶ選手席
 ひたひたひた我と闘う折返し
 出稼ぎへ選手になった便りくる
 完走へしんがりとという胸を張り
 総務課付きオリピックに出る選手
 不二

町内会の選手いろいろのが出され
退場の敗けた方にも拍手湧く
優勝旗選手の顔がみなゆがみ
負けて泣き勝つても泣いてる甲子園
全力をつくし敗れた選手の目がきれい
レコードホルダー選手は余力残しとき
選手交代女房へ孫引き渡す

佳

選手宣誓一回戦で消えてゆき
盜塁成功ポケットにあった守り札
往年の選手日曜ごにかりだされ
合宿で天才素振りにくり返す
補欠選手に出番がまわる敗け試合

人

期待される選手に自分の暇がない
地

選手村肩をどやして送り出し
天

勝った日の選手は実によく食べる

立ち読み

立ち読みの記憶が書いた答案書
立ち読みの初号活字の拾い読み
偶然にめつけた立ち読み中の母
マ切れの智恵は立ち読みから仕入れ

翁 童 選

真 奇

古 心

かつみ
宵明
静人
重泉
英詩

代仕男
代仕男
代仕男
代仕男
代仕男

紫月
宏志
真奇
翁童
代仕男
寿美子

ろ亭
紫月
宏志
真奇
翁童
代仕男
寿美子

竹馬

一、投句に

川柳塔柳箋

価 七〇円 送 七〇円

立ち読みで仕入れた話題弾んでる
カズエ
立ち読みのヒントで会議リードする
素身郎
立ち読みでかねてのバズル解いて来る
福水
立ち読みの仲間サインを持っており
伊津志
立ち読みの娘のスカートが短かすぎ
七面山
店主の目背に立ち読みよみ急ぎ
思月
立ち読みで今日の会話のネタ拾う
どんたく
立ち読みをしたのと別な本を買い
国彦
立ち読みの続き書店に來てるころ
操子
立ち読みの残りは買うて家で読み
可風
立ち読みも入れて儲かる店にする
不仕
立ち読みで半分読んで買うとする
寿美子
立ち読みの智識ポイントぬげている
かつみ
家で積んどき本屋では立ち読みし
かすみ
立ち読みにお礼言いたいほどに売れ
白水
速報を立ち読む一人また一人
敏
立ち読みのデカイ活字スポーツ紙
みどり
週休二日立ち読みにでも出掛けよう
松花
立ち読みの速さ斜めに読んで出る
隆子
旅行先でも立ち読みのくせを出し
秋月
立ち読みの横目の中の顔馴染み
千翁
片足は道路に立てて立ち読みし
右近
立ち読みのたぐい踏んだ足がふみ
たもつ
立ち読みもまたよし雨の止むまでは
静泉

菊

吉田水車選

立ち読みのふと急な用思い出し
 立ち読みの常連欄を死角とし
 背な児をあやし朝刊立って読み
 佳 英詩
 立ち読みの足如露の水せき立てる
 立ち読みの昨日の本が今日も有る
 立ち読みをやめて晴れ間の足早め
 何やこんなことも立ち読みやめにする
 立ち読みの子供が横で追い出され
 人 度古方
 立ち読みへ店の電話が鳴っている
 保夫
 立ち読みの目次は秋の北陸路
 春巳
 立ち読みへ箒が靴を追ってくる
 宵明
 立ち読みの子の眉目の涼しさ
 軸

遠来の友に自慢の菊贈落猿
 ご自慢の菊をほめればビールが出
 亡き妻の見様見真似で菊作り
 先生が嬌めれば素直な菊の茎
 叱るまい可愛い孫が折った菊
 お隣りというライバルの菊作り
 来賓は菊で見えない席につき
 本番のあしたへ薫る床の菊
 花鉄菊に向って素直なり
 季 宵明 子 英詩 二 秋 童 猿

退院の心つもりも菊日和
 悲しみもうれしさも白菊活ける
 菊人形歴史の一と駒子に教え
 段畑野菊も天に到りおり
 苦勞せぬ人がほめてる菊の鉢
 足袋替えて母が出て行く菊日和
 裏方は菊人形で徹夜する
 来年も頼むと返す菊の鉢
 草刈り場野菊四、五本刈り残し
 追悼式菊花幾万飾っても
 懸崖の棚を次ぎ次ぎ高くする
 菊人形裾の方から咲き終り
 人間にだまされ電照菊開く
 二人共菊の花挿す初対面
 本人は見合いと知らぬ菊花展
 旅の宿妻へ電話は菊のこと
 まわり道野菊に思い出を語り
 千竹馬翁
 貸衣袋こんなに映えて菊日和
 黙禱をしながら白菊の値を考える
 ほめられりや上げた菊も作るとき
 差しかえて巴御前は生き返えり
 寝たきりへ心の通う菊を活け
 思月
 人生の最後を菊に抱かれて
 福水
 菊人形女は赤い菊を着る
 綾女
 遺された菊は知らずに咲きほこり
 豊生
 見れば菊ふれば造花あじけなや
 軸

岸和田市文化祭参加

第24回市民川柳大会

日時 昭和四十九年十月二十七日
 (日) 正午開場二時締切

会場 岸和田市民会館地下会講室

司会 植山武助
 会場 高橋操子

来賓挨拶 岸和田市教育委員会
 岸和田市文化協会長

柳 中島生々庵
 兼 題 話

「氏 神」伊東静夢選
 「活 氣」堀川雄次郎選

「嘘」菊沢小松園選
 「忘れる」八木摩太郎選

「豊 か」榎本聡夢選
 「メーカー」西尾 栗選

「指」高橋操子選
 当日三題発表(兼席各題出句二句宛)

閉会の言葉 上林 加仙
 呈 賞 市長賞・教育委員会賞・文

化協会賞・きしせん賞・各
 題秀句賞

投句先 岸和田市宮本町二四一二
 (出席出来ない方) 吉村たけし宛

電話〇七二四〇七六〇四
 主 催 岸和田川柳会

後 援 岸和田市教育委員会
 後 援 岸和田文化協会

初歩教室

題「中」

本田恵二朗

夏菊に埋もれて眠る極の中

当教室の常連の一人であり、熱心な作家でもある堀畑善之祐氏（号奴風）が、入院加療の甲斐もなく、七月十六日長逝されたことを知らせて下さったのが、その妻である日日子さんである。柳友の逝去を心から悼み、ご冥福を祈る。日日子さんは夫の作句意欲を受継ぐとも言っておられる。それは何よりの供養であろう。日日子さんに惜しみなき声援を送る私である。ご霊前に謹んで一句を捧げる。路郎師を囲む一人になり給え

家計簿の数字が正直中句過ぎ

（もう中句ですなと家計簿に言われ）

カツラ取れば鏡の中に老いの顔

（カツラ脱ぐ鏡の中が急に老け）

中ジョッキ半分残して顔真赤

（中ジョッキ半分残し笑われる）

中卒を金の卵と云うけれど

（中卒を金の卵とおだてあげ）

綾子

益子

三十四

同

家中を目にして失物見つからず

中ほどに生きるくらしが手に入らず

（中流のくらしをつかもう手を伸ばす）

野次馬の中で私を見つげ出し

中だるみ同士の会話ビャガーデン

（ピアガーデン中だるみ連の怪気炎）

ご都合主義が中立の座を守り

（中立を守ればご都合主義と見られ）

途中下車民話の湖の風を聴き

（途中下車湖畔の民話風に聴く）

中吉のみくじへ吾家みち足りる

脳の中覗いてみたい稼きよう

森の中拾って歩く蟬の声

（蟬の声拾って歩く森の中）

忙中閑を得てささやかな旅

（忙中閑お粗末ながら宿浴衣）

財布の中味が素通りさせた縄のれん

（縄のれんが財布の中味あざ笑う）

明暗を分けて中日の土俵荒れ

石室の中に古代のおわします

（石室の中で古代の恋眠る）

盛衰の元元と云うバロメーター

（盛衰のバロメーターという中元）

ご先祖が中間調査に来るお盆

中位自己満足が伸びを止め

（中ぐらいで満足したから伸びなやみ）

倒産が会社の中味さう出し

（中味は空っぽです倒産致します）

中核にいたもおりたい背伸びする

ガタが来た肩中年の見栄を張る

車中団樂子のさわがしき憎めない

宗義

同

サヨ

同

静泉

同

カズエ

同

同

度

同

同

同

同

同

同

同

洛醉

同

同

大成

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資
会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 06 3452-1408

夜間 06 4400-8

物価高ばやいて中古皆捨てる

（中古みな捨てるくせに物価高をばやき）

（中古捨てまた捨て物価高ばやいてる）

決断のにおさを中間派と見られ

中とお互に折れた天の邪鬼

（名仲裁中を取り取り折り合わせ）

周囲のざわめきよそに死角の中の俺

（ざわめきをよそに死角の中にいる）

自動車にアイスポックス詰めて贅沢な旅

（アイスポックス車中にあり快適な旅）

石鯛の刺身盛り合せ中の上

（石鯛の刺身で晩酌中の上）

道徳へ中年のプライド許されず

（道徳へ中年のプライドたれず）

蟬しぐれ中々話も聞きたれず

（蟬しぐれお話中へ遠慮せず）

中々に思いは多きこの世かな

同

生仏

軒太楼

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(世の中の移りへ思うこと多く)
 頂きもの孫は中味をせきたてる
 独り者風呂の中から返事する
 デパートでお中元用の品選び
 (お中元の品選り迷い選り迷い)
 身体だけ大人になった中学生
 (声がわり図体だけはおとなです)
 中国展相棒探しに日が暮れる
 (人波が相棒呑んだ中国展)
 喝采の中で花輪も深呼吸
 (喝采の中で花輪が濡れている)
 中庸を守って恨まず恨まず
 中元のあとから無理を頼まれる
 (無理を頼まれて中元の意味が判り)
 是々非々と中庸歩き悔い少し
 生甲斐を中氣にストップかけられる
 人波の中で都会のふと孤独
 老母真中で婦省の夜が更ける
 中立の遠吠え谷へこたまする
 盃の中に浮んだ妻の顔
 中腰の男が持つてゐる処世訓
 中庸を知らぬかなしい右派と左派
 お役所は抗議をすれば検討中
 若者に似ぬ義理固いご中元
 中庸を説いて教頭にもなれず
 中だるみ悪魔の声に誘われる
 中年の子なし夫婦に隙間風
 もう一步中へと車掌の声が枯れ
 中腹の絶景ケーブルカーで見せ
 中段の構えで歩く苦労性
 中年の暴走傷が大きすぎ

つね 秀村 濁水 繁子 ますえ 道子 同 正則 陽山 紫宏 重み かつみ 藤持 幸生 同 喜洗 同 翁童 同 利美 同 伊津志 同人

中立の発言左右に突っ込まれ
 伝統の行事も中止さす物価
 中味より心が嬉しい子の土産
 バチンコに夢中大人の顔でなし
 名物にうまいものあり途中下車
 旧中の頭で新割り切れず
 出した数ほどは見舞の来る暑中
 中庸を味方にした右派と左派
 暮し向き中位の上と仲人口
 憤懣をボケツの中に耐えている
 手鏡の中に自惚れ秘めている
 疎開した思い出たぐる途中下車
 題一野一十月二十日締切(十二月号発表)
 宛先 倉敷市下津井一四一三四 千七一一
 本田恵二朗

★

東大阪市文化祭参加

川柳東大阪・第二回川柳大会

日時 十月十日(祭)

正午開場。出句締切一時半。

会場 東大阪市中央公民館二階 視聴覚教室
 講演 川柳塔社副理事長 川村好郎氏
 兼題と選者 (種号イロハ順)

ポス ト
 帰る 久保田以兆氏
 声 礪野いさむ氏
 祭礼 北川春果氏
 草新 永田帆船氏
 名 榎本聡夢氏
 感謝 戸橋高薫氏
 戸田古方氏

仏像 龜山 恭太氏

席題 二題(題と選者は当日発表)

賞 三百円也(呈、記念品及び大会句報)
 各題、最優秀句には東大阪市長、その
 他の賞状及び副賞贈呈。

出句 出席者に限る(各題二句以内)

主催 東大阪市文化連盟
 東大阪川柳同好会

★

50年版「川柳年鑑・公募作品」一人一句。
 応募句は「人生」「社会」「自然」の三類に
 大別される。選者は(人生)岸田万彩郎・太
 田黒花籌・他一名(社会)藤島茶六・西村九
 千坊・他一名(自然)鈴木九葉・佐々木福郎
 ・他一名) 10月10日までに川柳塔編集部へ。



PLUSS

高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部 TEL (33) 9974
 レストラン TEL (21) 2334

大萬川柳

「嘘」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 四百九十句
 入選 五十八句

可哀想な嘘を真顔で聞いてやり

大阪 好一

人間哀れ八卦の嘘にまたすがり

倉敷 梁水

明日わかる嘘を残して出る実家

富田林 維久子

嘘でしよう嘘だと言つて泣き

大阪 文秋

嘘言うても帰宅した娘へ安堵

寝屋川 小路

よろこばせ過ぎて嘘とはもう云え

大阪 満津子

うそ云えぬ性質ですと嘘を云い

大阪 ますえ

高笑いして嘘をかくす肚

大阪 三十四

嘘すこし愛の絆をつなぎとめ

貝塚 つき子

嘘すこしずつ剥げ別れの日が近い

大阪 十止庵

神様でさえおみくじで嘘をつく

大阪 あいき

門灯に心を決めてくぐる嘘

真実に触れず主治医は手を洗い
 笠岡 桃里

前借がこんどは母を病気にし
 宝塚 静馬

平凡に暮らす夫婦に嘘がない
 倉吉 弘朗

嘘という武器で急場を切り抜ける
 松江 晃男

方便の嘘がだんだん輪を広げ
 大阪 修史

神殿の拍手嘘のない頼み
 和泉 洛醉

水吸うて庭の緑に嘘がない
 和泉 太茂津

そんなこと嘘でつやると気にか
 大阪 柳志

嘘ついた子を叱るのに嘘が要り
 東大阪 清人

愛燃えて燃えてふたりに嘘がない
 松原 重人

善人の耳鳴り止まぬ小さい嘘
 倉敷 白水

かりそめの嘘から嘘がつきまとい

西宮 百酒

だまされる幸せ夫婦の笑い声

大阪 与呂志

尾を振って迎える犬に嘘がない

神戸 どんたく

惚れている弱身きれいな嘘に酔い

鳥取 洋々

嘘云うて来たにデートすっぱかさ

岡山 宗義

自惚れがまた嘘聞きに来たネオン

堺 一二三

入知恵の嘘まで云うた気の重さ

和歌山 マサ子

嘘多い世を手さぐりで遅々と生き

和歌山 マサ子

その嘘の片棒かつぐ無口なり

堺 天笑

自分であきれる程の嘘をつき

大阪 柳宏子

不器用な嘘が額に汗をかき

大阪 柳宏子

嘘一つつけぬ男で倉庫番

大阪 柳宏子

よくよくの嘘だだまされてやろう

岡山 千代香

憎めない嘘も転がり出るムード

岡山 千代香

信じ切る視線がうそをつかさせず

電話口嘘を横から指図する

和歌山 万作

バレそうな嘘へ上乗せしてる嘘

和歌山 万作

辻褄が合わない嘘の目をそらす

和歌山 富江

もう後へ引けぬ嘘をでっちあげ

大田 軒太楼

すがりきった瞳に嘘とは切り出せ

大田 軒太楼

催促へ嘘の上手を泣きにやり

奈良 本蔭棒

嘘でいい死ぬほど好きと言われた

奈良 本蔭棒

嘘少しませた波紋にうろたえる

門 真鉄児

逃げ道へきれいに敷いた嘘の石

大阪 好一

この嘘を開き流す妻いて平和

和歌山 マサ子

つき合いという今晚の軽い嘘

大阪 ますえ

下向いて働く姿に嘘がない

大阪 静馬

生涯を幸福にするとは円い嘘

大阪 貞祐

人ノ句

大阪 三十四

身に余る光栄という嘘もあり

大阪 三十四

友情を温たむ握手に嘘がない

神戸 静泉

天ノ句

大阪 柳志

借りる嘘貸さない嘘に押し切られ

大阪 柳志

運者吟

最後まで嘘で通してほしい妻

昭和四十九年度

ベストテン (八月現在)

一	花梢	一七、五	富田林	一〇	重人	一、二	今治	一六	千代香
二	天笑	一七、〇	堀	一一	柳志	一、二	兵庫	一七	凡九郎
三	静馬	一三、五	宝塚	一二	柳志	一、五	松原	一九	吸江
四	梁水	一三、五	倉敷	一三	どんた	一、〇	神戸	二二	柳安子
五	十止庵	一三、〇	大阪	一四	静泉	一、〇	神戸	二二	本蔭棒
				一五	明	一、〇	大州	二三	舟

生駒から

麻生葎乃

―若本多久志宛―

川柳塔九月号「白楽天の詩作に思う」をよみました。大変よい事をかいて頂きうれしく思います。現代の作家も少しは反省して一人よがりの句を作ったり、むやみに難解な字句を使わなくなるでしょう。

川柳は最も短い詩型でありますから現代の複雑な社会状態や人間の思想を盛るのにひと工夫いるからと云って、あまりにも飛躍した表現はどうかと考えます。私等が見て二、三年もすれば立派に詠めるような句に大層もったいをつけて批評していられるかと思えば、大変に飛躍したわかりにくい句に自分の理念

から生れたものを附加して、いわゆる同情にすぎた批判をしていられるような記事を時々見ることがあります。

現代の川柳界は混沌としています。何時になつたら落ちつくことか……と思います。

☆

川柳塔社常任理事会

―九月四日―

49年度二賞決定の日である。何回経験しても緊張の連続だ。

薫風さんが病院を抜け出してまで出席するなど、選考委員の熱意は日ごろの笑顔まで消してしまふ。

路郎賞は倉敷の藤井春日氏、川柳塔賞は柏原市の小谷葉子さんにきまつた。

津波のように押し寄せる物価高について誌代の値上げへ追いやられてしまった。別項のように五十円ご負

昭和四十九年度第十一回
「ひらめき」五句以内
締切 十月二十日
第十二回 (四十九年度最終回)
「締める」五句以内
締切 十一月二十日

以下略
投句先
〒593堺市堀上緑町一の三七の七
藤井一二三 大萬川柳係

担願うことになった。また一月攻勢があるというが、イヤな世の中になったものである。

出席―文秋・多久志・古方・水客・庸佑・生々庵・柳志・形水・薫風・いわを・小松園・一三夫諸氏 (榮・好郎・春巢氏は欠席)

ショッピング・ゾーン

梅田一番地

楽しいショッピングとくするの
いこいさまで
百貨店



大阪梅田・水端定休
阪神
電話(06)345-1201(代)

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼川柳塔社49年度の二賞発表句会と同人総会が10月6日午後一時から大阪府教育会館新館四階大ホールで開催。今年は兼・席題選者を全部地方の指導者にお願ひすることになった。「川柳」時代にもなかったことである。(懇親宴は四時から。一般の方の参加歓迎)

▼第26回西日本川柳大会は路郎句碑建立25周年記念とあって、生々庵主幹が兼題選、多久志氏が席題選、好郎氏が柳話、栞氏が腹乃選の特別課題を代って発表と川柳塔社総動員の感があつた。その他各地から同人諸氏が大量出席した。二四三名の盛会だった。

▼「医家芸術」九月号は「笑ひの特集」として座談会「川柳入門」が柱となつ

て、生々庵主幹、本誌論議の鈴木黄氏、八木敬一氏らが11ページにわたって「古川柳」を中心に語られた。実のある好読物である。

▼日本川柳協会創立準備委員(大阪川柳クラブ・砂人・宣介・雲雀・生々庵・塊人・橋次・諸氏)——創立準備事務局長(大井正夫氏)で、川柳人相互の親睦をはかり川柳の普及と興隆を目的とす。事業——会報と川柳関係文書及図書の発行と刊行及援助——川柳に関する各種会合及大会と研究会開催、幹旋、後援、設置——表彰と慶弔——会館の建設——その他本会の目的達成に関する一切の事業。賛同の方は暫定の連絡通信費として五百円(郵券10円・20円)一応九月末日で締切。連絡先は〒5300大阪市北区宗是一大ビル608片山法律事務所内「日川協準」

▼第19回全国川柳作家年鑑が堂々P320の大冊で発行された。一八九九柳士参加は史上最高のものであろう。一〇〇円(送料共)

発行所〒650神戸市生田区相生町一丁目ふあうすと川柳社。

▼全国鉄川柳人連盟の新しい事務局は〒730広島市尾長町一六の小林輝次方

▼柳都九月号は白石朝太郎追悼号。二百円(十六円)――〒956新津局区内本町一柳都川柳社。

▼田中鳥雀氏(京都市・元川柳雑誌社京都支部長として活躍)が八月二五日の毎日新聞京都版に「刑務所で日川柳教室で法務大臣表彰を受けた田中英雄さん(七五)」と、「ニュース・その人」に登場された。自宅は京都市上京区相国寺北門前町上ノ町六七〇。

▼竹原川柳会事務所(山内静水氏)に電話新設12・4554番。なほ九月一日の近県川柳大会は16号台風の悪条件にもかかわらず一七〇余名の盛会。四国方面からの欠航で残念がっておられた。四国柳友の通信も本社に届いている。大阪から菊沢小松園氏ほか数氏出席。

▼第21回八尾文化祭市民川柳大会は10月20日開催(本誌参照)

▼岸和田市文化祭川柳大会(49参照)を開催して意気あがる。きしせん「第一七四号は本年二月句会から六月句会まで発表。岸和田市野田町一七五、高橋操子方岸和田川柳会。

▼林蒼蛇楼氏(ハワイ)から「こちらでもインフレで月給は上がっても物価に追いつきません」と。

▼藤村淳子さん(ニューヨーク)から「薫風さんに同人句集を送っていただきました。南米に二冊、シアトル二冊(柳友)差し上げたので郵送費などお知らせください。」

▽句集△

▼小泉十支尾句集「不協和音」

▼進藤嬰兒句集「北方領土」

▼山村祐氏らの同人誌「対流」いずれも本誌参照。

▽同人の動向△

▼西尾栞氏(八尾市)ベル

ヴィユ市(姉妹クラブの親善使節)では歓迎攻めでグロッキーですと——人生の仕上げの夫婦空の旅——栞。

▼若本多久志氏(西宮市)けいさつの友へ毎月川柳漫筆を執筆されているが、西日本川柳大会へ愛車を持って出席された。

▼菊沢小松園氏(大阪市)から竹原の近県川柳大会の寄せ書拝受。緑之助・日満・祥月・牧人・凡九郎・酔々・儀一・美幸諸氏はか本

食べすぎ・のみすぎに

新タケダ胃腸薬

効能—食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔い・悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に。

☆3層錠…27錠・60錠・150錠 ☆顆粒…16包・40包



タケダ

社同人が多数出席。

▼八木摩太郎氏(堺市)は8月24日安西冬衛を偲ぶ会に川柳部門から出席。「評伝安西冬衛」出版の詩人三十名が会合。未亡人を囲んでふてふの詩碑ザビエル公園で開催された。

▼月原宵明氏(今治市)は東京商工新聞8月11日に「柳誌汐風の足跡」を執筆された。なお松山で開かれた愛媛芸術祭川柳部門で宵明・文庫が一、二位を分けましたと。



▼岡崎祥月氏(松江市)は竹原の大会の夜、簡保センターで一泊、台風のスさまじさに眠れなかったとのこと。大山祇神社・音戸大橋などを見て帰松。

▼吉岡通児氏(松江市)近く「続・巻頭吟を斬る」を

再開しますと。

▼横山一声氏(岡山市)は月七日大阪空港から三泊四日の予定でフイリッピンに行つて来ますと。

▼出原敬一氏(岡山市)本誌表紙でおなじみの直原玉青画伯はわが郷土出身の方で、このたび吉井総合センターへ「厳美溪の図」五〇号を寄贈になり町民の眼を楽しませてくださいました。氏は月斗・虚子・誓子諸氏とも親交篤く南禅寺の高僧とも交り禅画一如の精神を探求されておられます▼本田恵二朗氏(倉敷市)から一末っ子の娘が八月三十一日に女兒を産み、これで孫が五人になりましたー五人目の孫ソプラノで呱呱の声一恵二朗。

▼若柳柳花氏(高槻市)五回目の眼の手術も済み退院。黒川紫香君は三人目の娘さんが男子誕生、孫がまた一人ふえました。

▼児島与呂志氏(大阪市)の長女、野田美千代さんが八月二十七日理恵ちゃんを産み、与呂志さんは初孫を

得られた。

▼浜野奇童氏(岡山市)勤務校の百年誌をまとめるよう命じられ、大会を目前にして悪戦苦斗の二週間でした。

▼関美子さん(水見市)TBSラジオ「七円の唄」永六輔で放送されたものが読売新聞社から「追伸・七円の唄」として出版。私のもその他大勢の中にあります。

▼越智一水氏(今治市)は八月十七、八日京都で開かれた全国郵政川柳大会で松江の恒松町紅さんに逢いました。

▼大阪市交通局川柳会の児島与呂志氏が新聞へ川柳塔のPR、塩満敏氏が書店でPRと盛んなPR活動をされている。

▼三井酔夢さん(香川県)アメリカの交換学生を預つて賑やかな毎日でしたがやっと終わりました。よく食べよく歌い踊り、もう中年の体力ではついていけませんと。

▼西出一栄さん(大阪市)

今度の入院はとでもきつい

肋間神経痛に心臓ぜんそく、それに肋膜炎に水がたまり少し弱りましたが、どうやらまたベンだけは持つ気持ちが出はじめましたと。

▼堀江芳子さん(島根県)三年前のが再発して七月八日に救急車で入院しました。早く元気にならないうと正朗の句を清記してやることもできませんと。(島根県大原郡大東町、雲南共存病院四階二号室)

▼長野文庫氏・堀内曉風諸氏の寄せ書きがある、水郷川柳社の夏の大会が八月二十五日開催、盛会だった。

▼西田柳宏子氏(大阪市)耶馬溪から旅信一ボタ山の哀歌録に包まれるー柳宏子

▼宮西弥生さん(八尾市)ロンドンから旅信一真赤な二階バスや黒色の四角なタクシー、食事にも馴れ毎日快調ですと。

▼福田丁路氏(高槻市)伊豆長岡から旅信一晩の霊峯富士に息をのみー丁路

▼沢山三治氏(和歌山市)の号は福水。

▽10月の句会△

▼南海川柳会は一十七日六時から一題一信号・うやむや・孤独・会場は南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会は二十一日六時から一題一異性・抜け駆け・握る・技術・会場は松崎町三丁目大萬。

▼堺川柳会一旬会日未定、同会へお問い合せを一題一炎・隙間・八分目・虫・会場は八木摩太郎居。

誠意と技術で
世界のために

SHARP

シャープ株式会社

本社 九月句会

会場 以和貴荘

六日 午後六時

台風16号の被害が四国、広島、東京方面の柳友諸氏にはなく、どうやら九月は無事のようである。おかげで今夕も六九名という盛会―篠山の英断氏のご出席、常連和歌山の方々と賑やかに九月柳翁忌句会の幕があく。

柴副主幹の柳話は「アメリカ土産」である。八尾市とベルビュ市のライオンズクラブが姉妹クラブとなり、氏がその親善使節としてご夫妻ほか十氏と共に渡米された。

日本食に郷愁を感じたり、ラスベガスで川柳塔社の資金を稼ぎそこなったり、カスミのかからぬ映画を見たり、愉快な話がつぎつぎ飛び出してくる。

最後に、ホノルルではウィロー社の築山快夢起ご夫妻と電話の対面となった。また前山北海氏にも電話されたが、ついに声を交わすことが出来なかったそうである。

さ、これからが氏の独壇上で、でっかいプランを披露された。ハワイウィロー社と菜の花の合同句会の大構想である。一年間ほどの積み立て案など、もう夢はハワイを駆けめぐる。

とまれ楽しい柳話だった。

今月の月間賞杯は好調香川酔々氏に輝く。

―進行―高杉鬼遊―記録―玉置重人

出席―与呂志・重人・たかし・古方・正彰
万作・富江・鶴声・喜風・正面子・一步
右近・栗・一三夫・柳志・天笑・文秋・いわ
を、肖二・綾女・雀踊子・一舟・維久子・凡
九郎・美幸・静馬・葛城・百酒・笑風・メ女
・太茂津・福水・千万里・多久志・六竜子・
悦郎・誓二・形水・瓢太・喜美子・庸佑・儀
一・酔々・水客・夕花・あいき・君子・英断
・千梢・素郎・幸生・牧人・十止庵・吸江・
好一・鬼遊・南柳・柳信・鎮彦・好郎・岳人
・敏・三郎・弥生・小松園・つき子・薫風・
清女・葉子。

席題「筋骨」

城

一舟選

たくましい筋骨ホステス皆さわり
筋骨に男の匂い意識する 吸江
秋風やわが筋骨のたよりなさ 三郎
夏瘦へ筋骨賞めて毒づかれ 太茂津
筋骨隆々C.M.に備われる 小松園
筋骨たくましく金で困るとは見え 小松園
筋骨の谷間を玉の汗が縫い 右近
逞しい夫の筋骨信じ切り 福水
筋骨を鍛えて社長未だやる気 牧人
横綱にそっと触れてる女の掌 正彰
筋骨は瘦ても男と言う自覚 万作
筋骨の後姿も見てもらい 正面子
鉄棒の汗が筋骨作りあげ 維久子

筋骨を誇る若人疎外され
たかし
千梢

嘘もたぬ暮し夫の肩の巾
雀踊子

筋骨にはれて母さん嫁けと言
い

妻んではみたが筋骨見くら
れ

筋骨隆々恋の涙も知って
いる

筋骨の割にかせいでなく
れ

筋骨の強さを知らぬパチン
コ機

無為無策筋骨だけがたくま
しい

筋骨を事務所の隅にもてあ
まし

花嫁の横で筋骨照れてい
る

筋骨を見せてうれしい退院
日

娘骨が出来て亡夫の影をと
め

労働の汗を恥じない筋骨美
し

筋骨隆々今日も都会の穴を掘
る

筋骨も要らぬ農家の子が育ち
ぬ

勉強より祖父は筋骨あぶな
がり

席題「反省」

村田 飄太選

喉元が過ぎて反省忘れさせ
富江
反省へ母が泣いてる刑事室
富江
反省を知らぬ若さでつつ走
り
反省会そこへも酒が顔を
出し
美しく老いたし互に振り返
る
反省をさせないお人で壁に
遇い
反省を活かすチャンスがや
つて来
ず
左遷辞令で反省の時を貸す
牧人
染みついた癖反省を受けつ
けず
許してと言えないままで別
れて来
柳志
反省も早い破るのも早い
文秋
反省は親にさせたい子の非
行

アニマルと言われた過去が淋し過ぎ
一粒ずつ苺つぶして反省す
二日酔へ子がとがめてる眼に出合う
反省の心に木魚胸を打つ
うちの子に限ってなどと無反省
いさかいの愚かに気づいた迎え傘
一線を越えた過ち胸を刺す
反省をすることばかち古稀迎え
妻に勝ち子等の目に負け悔いている
反省を迫る女の眼がきれい
反省へ妻は無言のお茶を入れ
反省の裏見透して鏡
それ以上叱らぬ父へ悔いている
反省の夫はげましミシン踏む
使い捨てに反省求める物不足

席題「天気予報」

島居 百酒選

電話でも予報も一度確かめる
天気予報適中雨の旅つづく
水撒けば予報どおりの俄雨
予報通り快晴元旦の富士は冴え
遠足へ予報信じて子のいびき
黒猫に又笑われた予報官
快晴を告げるテレビは太安日
浜育ち明日の天気を知っている
留守番の機嫌予報の雨でよし
予報はどうあろうと晴耕雨読
どんぴしやり予報が当る目出度い日
天気予報山には山のルールあり
当らぬを承知で予報きいている
当ることもあるでえと傘持たせ

文秋 右近 静馬 誓二 千万子 幸生 笑風 英断 太茂津 素郎 福水 静馬 喜美子 多志

外れてほしい時の予報はよく当り
天気予報第二プランも作るとき
暴風雨予報が少うし憎うなり
置き傘があつて予報へ無頓着
又今日も所によつて俄雨
弓なりの日本天気予報みなちがい
台風が近づき視聴率下がり
どつちつかずの天気予報が気をもたせ
ところによらなかつたのか傘は持ちとなり
台風をムチで追つて予報官
駅前で傘を待つて予報官
迷走の台風予報を振り廻わし

兼題「飽きる」

金井 文秋選

飽くことも知らず振子の行き戻り
同棲のどちらともなく飽きてくる
美食に飽きてゲテものをあさり出し
外食に飽いて二人は縋り戻す
どんこんで遊びに飽きた兄が帰り
自分自身に飽きて変身考える
もう飽きた玩具の値段は五十年
もう飽きた玩具の値段は五十年
飽いたなど言えぬ苦しい肉内職
一品に飽かぬ小鳥の羨まざ
朝酒と朝湯にばけにまだ飽きず
立つことに飽いても地蔵たつ定め
総入浴しても飽きない色と欲
つくられた美貌そろそろ飽きはじめ
国民も角栄ぶしを聞き飽きる
飽きる人行く人バアの灯は消えず
飽きると知らぬ値上げに日日追われ

文秋 十止庵 美幸 笑風 葛城 千梢 吸江 瓢太 右近 三郎 百酒

第21回 八尾市文化祭

市民川柳大会

時 10月20日(日) 正午開場
所 八尾市商工会議所 三階大ホール
近鉄(大阪線)八尾駅下車南東三〇
〇m 八尾市役所前

開会の辞 香川 酔々
柳話「川柳に生きた女」川村好郎氏
兼題及選者(アイウエオ順)

海 橋高 薫風選
文化 小松原爽介選
後 姿 西尾 榮選
磨く 西村 芳川選
のれん 増井不二也選
果物 山本 磔選

閉会の辞 中山 凡路
◎席題二題 各三句吐

投句先 千51(八尾局私書箱第九号)
八尾市清水町一丁目一六
八尾市立公民館 市民川柳係

規定 句箋(4cm×22cm)に各一
句毎 裏面に氏名(雅号)

記入のこと。

投句締切十月十日受付分まで

当月も受付けますが、なるべく公民館宛に投句下さるよう願います。

飽きもせず夫婦情性という暮し
飽きられる日もあるおんな貯めている
飽きたら飽きられ秋がしのび寄る
かぶと虫飽きられ秋がしのび寄る
飽きたとも言えず病む身は苦く飲む
新妻へ飽きたと言えぬボンカレー
家中がもう喜ばぬ釣のはぜ
遊園地飽くこと知らぬ子に疲れ
飽きもせず曲った松の枝眺め
大臣の福祉云々聞き飽きる
飽きることなき美人画の鼻の穴
飽き性の癖に丈夫な方を取り
鈍感な夫に飽きる日が恐く
飽きが来た心を責める小鳥の死

君子 十止庵 酔々 万作 静馬 清水 形水 葛城 水客 文秋

兼題「魔法」

神谷凡九郎選

魔法ランプ持つと不思議な顔になり
楽屋では魔法の箱が抛ってあり
人間の迷い魔法は妻が解き
少年の瞳は魔法を理解つけてくる
魔法から解かれて美容院を出る
狂乱の魔法が魔法の杖を折る
魔法のように女笑顔を仕舞いこむ
頼まれた舞台で魔法の裏に酔い
オカルトブーム万四礼よ湧かないか
魔法師にも気苦労のある腕を組み
一つの世も魔法に庶民だけ踊る
ない袖に魔法の杖があるやろか
勘当の私に魔法の女でない彼女
魔法でもかて消えたい女に会い
笑茸魔法使のお帰りだ
ちようど五時魔法の解けた顔になる

悦郎 小松園 与呂志 君子 天笑 肖二 水客 太茂津 瓢太 雀踊子 十止庵 重人 六竜子 つき子 正面子 美幸

一分間の柳論

この二月、麻生霞乃先生からのお便りに、
『近頃は明治、大正時代の短歌も研究してい
ます。晶子にしろ牧水にしろ斎藤茂吉にしろ
啄木にしろ流派はことにして、みんなそ
れぞれの個性がハッキリしています。色々な
詩型のもを読むと言うことも大いにリズム
の研究となり、詩型に親しむものの忘れては
ならぬことと思います。』わたし達、川柳の
道に籍をおくものは、俳句、短歌、詩の研究
をたゆみなく重視し、そこから学び、人間を

越智一水

みがき、川柳に人間のすべてをうちこみたい
と思っている。ペン先で、むつかしい文字を
もて遊んだ川柳は、文芸的価値はあっても、
人間の血と肉になる句ではない。平凡な川柳
であっても真実をうたつておれば、生命があ
り、教訓がある。ペン先の器用で作った句に
は思想がない。そして大衆をわすれている句
が多い。階級社会での短詩型文芸である川柳
は、常に民衆の立場に立っている句こそ真の
川柳といえる。

兼題「心酔」

戸田 古方選

お隣りも魔法で家を建てとらず
ひらげごまなんば言うても赤字なり
母の魔法だまっても眠てしま
まごなごをしたら魔法使いやと言われ
すんなりと魔法がおはなししく
魔法などの答はなし死を悼み
魔法使の鼻に似てきて酔うて
種きいてしても魔法おもしろ
生きている事が魔法のように見え

一舟 どんたく 維久子 一三夫 古方 太茂津 水客 古方 凡九郎

心酔う史跡の小石気にかかり
うなずいて聞く説法にせきもなく
無意識界一点見つめてる境地
腹減った儘で心酔しきれるか
心酔の人に馬の意志がない
日記書くように便りをくれた弟子

夕花 清女 太茂津 幸生 静馬 一舟

心酔の人に実印撫でて見る
お金に心酔お金にだまされる
人相は観音さまの笑みで酔い
心酔の亡夫責めまいそんな過去
心酔の眼で馬鹿サ加減が見えてない
心酔の芸に貧しさつき纏い
何に心酔したのか化粧まで忘れ
心酔をされたが素直に喜べず
心酔の道に手足の枷がある
心酔の寡婦女でないよいとまけ
指ならすくせまてまねてみたい人
面映う心酔してた頃の日記読む
予言者に心酔逃げの仕度する
漱石に心酔野良猫拾ろてくる
私生活まで心酔者似てきそう
山頭火の句集背負って遍路する
心酔をしてる唇吸い盗られ

重人 敏 太茂津 万作 凡九郎 喜風 吸江 百酒 肖二 悦郎 重人 水客 酔々 凡九郎 英断 満



摩天部氏と女流作家

兼題「波」

若本多久志選

心酔をしてから教祖神に見え 三郎
心酔の顔は狂わぬ水車 宗義
心酔の頬を無情の風がうち 登美也
有頂天になつて私を見て 水客
心酔の深さを師の計に教えられ どんた
心酔者もう善悪へ遠く 凡九郎
心酔というが全集読んだだけ 十止庵
心酔のじつと汗に気づかない 笑風
心酔の師と一汗に合掌す 十止庵
極まれば華嚴の滝の中までも 古方

旅の夢 遠く誘うて波の歌 どんた
サーフィンへ雲縦になり横になり どんた
積立ての夢はハワイの波に乗り 日満

故郷の波は黄金の色でよせ 宗義
哀調を波がかなでる 佐渡情話 登美也
もう夏とお別れ土用波のよし 喜美子
北斎の波は曲豆に似て砕け 葉
波風を立たせぬコツか眼をつぶり 吸江
崖壁にたわむれてる春の波 一歩
戯れる若さへ挑む波頭 富江
波紋また大きくなつて女あり 弥生
ゆずり合い心の波を消す夫婦 悦郎
肩揚げをとれば世間の波が寄せ 維久子
引いていく波に一つの悔をのせ 夕花
命消ゆる波紋残して釣られたり 十止庵
波一つ立たない湖底に眠る秘話 弥生
朝焼けの波日本を愛し度し 与呂志

堺市農協の「つため川柳会」を指導して
る。そして婦人の趣味講座をもち、寺院古跡
めぐりなどのほか、川柳作句活動も続け、メ
ンバーの中には女流のベテラン作家も参加し
ている。

作句だけではなく、路郎師の遺稿や、川柳
随筆の講義、または世にあまり知られていな
い事柄の川柳話は大いによるこばれている。
他の作句本位の川柳句会とは違い「特色の
ある川柳の集い」だと自負している。

農協の趣味講座は開設以来二年を経由し、
短歌、俳句、書道もあるが、川柳もその一つ
である。この中には川柳塔社の同人も参加さ
れている。

(八木摩天郎)

夫婦愛大きな波を一つ越し 笑風
波の音二人は別のこと 形水
人生の大波小波きざむ 一三夫
とび魚が眼の下に見る波もあり 鬼遊
野仏の芒の波におぼれそう 女
月は詩人ヘドロの波を金波にし 三夫
水すましワルツ踊れど立たぬ波 右近
波の光ささる女のサングラス 雀踊子
年輪の波が録るした浮き沈み 百客
見返れば遙るか夫婦にある起伏 正彰
激流を過ぎてさざ波稚魚を抱き 千乃子
訴えるように汚れた波が来る 千乃子
白波に消える子亀の幸折る 千乃子
サーフィンのように人生乗り切れず 多久志

(河井福佑・整理)

とき 昭和49年10月20日(日)

午後一時開演

ところ 大阪市南区長堀橋筋

一丁目二四

福德相互銀行八階大ホール

第七回

奇術発表会

(ご来場歓迎)

関西奇術教室



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳たましま

稲田 豊作 報

友情の深さは盲点だけを衝く
刃物捨てて十本の指だけかめる
歳月が水に流れて握る
歯車が一つ狂うている平和
くちびるを噛んで明日を見逃がさず
懺悔するとき奔流となる血潮
植え替えるのきくものならと子を思い
花植えて花の命を考える
裸一貫父の背骨はまっすぐ
指で噛んで子供の意地が地をにらむ
歯車の一つがストを主張する
その真に何かかんでいる疑問点
傾聴のチェックしている疑問点
汗流す幸せ過去を振り向かず
米価格天までのぼれと田を植える
敗北の言葉少な奥歯かむ
せせらふは変らず過去を流し去り
川柳ささやま 河原みの報

扇 三幸堂 水
梁 澄子 水
千 翁 人
八 笑 人
林 草 鶴
鼓 一 草
誠 三 坊
豊 林 一
麗 朝 二
静 海 水
安 静 水
流 風 子
秀 子
素 江
近 江
可 住
百 合 子

本職を二の次にするお住職
長老の口が静かに決をとり
針をさす一言だった口押さえ
口きかぬ日の重なりて花いじる
スカートがバツと広がるフイナレ
膝ボンボン蓋ずかしがりに戻すだけ
ミミはいて和室の中の立ち回り
空気を信用ならぬ世とはなり
信用をされて預る鍵光り
みそ汁の味には俺の生活詩
冥土から追い返されて生きてます
編みあげたクモに済まない果を破り
川柳大阪(大阪市) 児島与昌志 報

正札を付けて商魂二割引
きれいな妓が水かけ不動に願うこと
乗り換えて乗り換えてローカルの旅業し
他人さんの娘でも気になるホテル街
雨宿りうっかり踏んだ自動ドア
野良犬が振喚きまわる雨宿り
花火見える方へベッドを向けてやり
花火見える方へベッドを向けてやり
肩車花火へ孫を差上げる
肌で知る對話が出来て実を結び
交流で友情と云う橋が出来
アダムとイブ交流させた蛇も居り
結婚も離婚もマスコミ筆が派手
マスコミが造った花の武器ある草
マスコミにペンと云う希望号
少年の夢乗せた団体希望号
巨費投じ今地図帳にのる開通
道芝の不満ぶつけたこの一票
道芝に隠くされ野仏ある大和
菜の花・富柳会合同句会

越 久 山
ひ 平 子
喜 美 代
喜 美 代
と ン ぽ
み の 子
一 志 楽
紫 雨 水
村 雨 水
雅 雨 水
誓 二 果
重 人 舟
眉 風 水
笑 風 水
本 風 水
三 風 水
洛 風 水
六 風 水
至 風 水
喜 風 水
道 風 水
魚 風 水
与 風 水
美 風 水
鶴 風 水
小 風 水
松 風 水
園 風 水

一行詩型研究

『対 流』

一部 三〇〇円
送料 五五円

川柳の山村祐氏と俳句の津久井理一氏
が手をとりあつての異色誌。正に大人の
同人雑誌という格調の高いもの。

発行所 〒170 東京都豊島区北 大塚
1 の 33 の 4 シャレエ大塚台
森 林 書 房

小泉十支尾句集

額価一、〇〇〇円

『不協和音』

第一句集『朱の目々』につぐ第二句集
である。川上三太郎門下から『柳二句集
I ナル』発行と略歴にあるが、誰にでも
わかる句に好感がもてる。

発行所 〒601 京都市南区東九条西
河辺町三〇 川柳ジャーナル社

進藤嬰兒句集

額価 三〇〇円
送料 四〇円

『北方領土』 額価 三〇〇円
北海道に生まれ、北海道に育ち、北方
領土返還を叫ぶにつけて句集がこれだ。
拿捕つづく限りシャボン玉こわれ

発行所 〒065 札幌市東区北21条東
3丁目七三一一五五二六 札幌川柳社

お喋りが火種を置いたとは知らず
視界ゼロ夢は魔性のにお通りか
結局は腰のすえようかお通りか
悲しみの記憶の中に轢がない
素晴らしい話聞いている夜の音
七転び八起き達磨に腰がくねい
霧の中訣れ話しに足てくねい
叩き売り見る織田作のふところ手
火を貸して山の話でウマが合い

百 酒
十 庵
凡 九 郎
夕 花
美 代
鬼 遊
醉 々
太 茂 津

実力があっても出世の難かしさ
ユニオンの実力資本家舌を巻き
実力の見せ場次第に積んで行き
和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報
夜光虫まつわる小船浜に揚ぐ
借りてきた鉄隣の癖がつき
泳がしたつもりの星におどらされ
芸術と云うでタレント脱ぎ捨てる
父に似たタレントが出て皆笑い
流れ星拾いてゆけり高見順
いさかいの元は鉄の置き忘れ
湯上りの星は裸ではめられる
タレントは落選の弁ネタに売り
馬鹿な事喋ってタレント孤独です
川柳わかやま 野村太茂津報
朝の茶にふとしあわせを感じとり
妥協せぬ末座の一人茶をこぼし
茶柱に女のおろかしさを賭ける

雅号ぶっちゃけばなし

お お どう



竹内 翁童

た け う ち

(132)

本名の「一郎」がきらいで(今でも)俳句、短歌のころは雅号遍歴、市朗、元(げん)翁童、冷静堂、かずをとまだまだきがない。春日、素身郎師のご指導で川柳に親んでからは翁童に定着。今では老いて童心を失なわぬ自戒として、また柳味ある号と自讃しています。本年六月転居、ご近所に同性同名の竹内一郎氏がおられ、郵便物が行ったたり来たり翁童は直行便です。ちなみに浪曲とは縁もゆかりもありません。

(会社員(労務)四十歳)

お茶にごす言葉で尻尾つかまれる
消す術のない片想い未だ続き
いつか消える命小しな徳を積み
国訛り消え厚化粧板につき
水俣の怒りの消える日を願う
ポーナスの噂だけきく日の無職
ポーナスがジャンボで海を越えてゆき
ポーナスの軽さ愚痴吐く縄のれん
夫権手に還る本日ポーナス日
泳ぐよりもがいただけの一メータ
水しかだけ泳いで船の旅もする
少かきが慾しいと思う日も暮れる
この愛もやがては消える日の孤独
浮くことを泳ぐと決めて金魚鉢
鯨の尾は夏雲とめて身をそらし
雑草に育って泳ぎに無理がない
駒つなぎ川柳会(大阪市)岸南柳報

やりくりのタノモシみんな空になり
やりくりが選挙ポスターあざ笑う
やりくりが親を追い越す財となり
息抜きに来た故里も選挙戦
息抜きも知らずヤングはよく遊ぶ
汗かいた後の息抜き風な電
息抜きの旅がささやく市場
大掃除息抜きをさすぬすみ酒
息抜きも知らずに貯めてねらわれる
生理休暇とかで女息を抜き
息抜きの旅小遣も添えずに呉れ
息抜きのほめは土工に雨がない
息抜きのつもりがひびの入り始め
息抜きのつもりがひびの入り始め
南海電鉄川柳会(大阪市)辻
リリンリンサイクリングに道ゆする
追い越しの自転車会釈して通り
自転車をおりて気の合う立話
自転車の墓場となっている空地
洗帯のカートを横目に踏むベタル
駅前に並ぶ自転車団地の灯
自転車の助産婦妻茶で迎えられ
排気公害へ自転車だけが見直され
京都・塔の会 松川
山の花そえて料理も山の味
戦友に戻り貴様と俺の仲
政岡の墓訪えば朝顔小さく咲き
計算器たたいてみたい病むベツド
徹夜行列故郷やっぱり遠いとこ
紫陽花は色濃く梅雨の夢を消し
三猿になるときもあり宮仕え
濃淡が壺の焼き術語りかけ
寿へ力一杯墨をす
平均を出してそれから考える
新線開通湖北の雲が近くなり

はやを 柳水 紫南 綾一 規彦 鎮子 茂子 柳信 多津 柳郎 儀天 肖二 小松 主水 綾清 宏子 肖二 柳一 誓二 季賀 水報 杜蘇耕善飛笛求季和誠水の 的堂三信鳥珠芽賛友史客 的堂三信鳥珠芽賛友史客

・ペンペン草・

★49年度上半期の芥川竜之介賞は該当作品なし、直木三十五賞作品は藤本義一氏の「鬼の詩」にきまつた。

かぞえて両賞とも七一回目（年二回）わが川柳塔社の路郎賞は今年で九回目、川柳塔賞は八回目を迎え、Aは倉敷の藤井春日氏だが岡山勢の強さには舌を巻いてみることにする。Bは小谷葉子さんにかがやいた。

★藤本義一氏の「鬼の詩」

は落語家が主人公だが、去くが遊ばなければと、遊里ルだ。（これは明大出身の八月十五日未明、元落語（古い言葉だナ）の道へ踏れ毛でウェブしているように見えたのである。）

★鉄火場にも出入りして、

わすか一年たらずで立派な極道になった。始めのうちはオヤジを諫止する孝行息子気取りだったが、遊ぶほかに、この道のおもしろさに魅せられ、もう家業をのぼし、そのころ流行していた半バックにウエー

★オヤジの女極道を止めさすには、まず品行方正のぶというキザなヘアスタイル（もう一度使う）といえ、

★大阪市内の庶民的な遊里

十一月号から

誌代改正

日頃の物価高攻勢に歯を食いしばってきたが、それには限度があり、やむを得ず次号から左のように改正いたします。（ご送金す正の方は次回ご送金から改正講読料でお願いします）

川柳塔社

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選

水煙抄（10句）川村好郎選

課題吟（各題5句以内）

「冬山」板尾岳人選
「除夜の鐘」村上春巳選
「人権」中村ゆきを選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

新年号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選

水煙抄（10句）川村好郎選

課題吟（各題5句以内）

「うさぎ」河内天笑選
「寒行」直原七面山選
「国旗」伊藤茶仏選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

10月6日は二賞発表句会

定価二百五十円（送料十六円）

半年分 千五百五十円（送料共）

一年分 三千円（送料共）

昭和四十九年九月二十五日印刷
昭和四十九年十月一日発行

編集人 中島蓬太郎

印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

／ぼ、飛田と松島だった。この線香代（花代）は一本十五銭、つまり一時間一円五十銭だった。ぼくはゼニもないのに南地で遊んだ。今で云えば会社の部課長クラスの遊び場なのにケツの青いぼくは堂々？と出入りしたものだ。現在の道頓堀筋の裏側の細い路を芝居裏といって、一現茶屋が密集していたのである。今は芝居小屋といえは中座だけだが、むかしは東から弁天座・朝日座・角座・中座・浪花座とならび、こ

葉子コーナー

▼自動扉も人見知りするらしい。私が立ってもなかなか開かない、内より、ボーイさんが笑いながら立ちますと聞く。軽量人には時々、開かぬの扉らしい。

▼それ以後、自動扉の時は力を入れる事にしてあります。

れを五座の槽といったのである。

★この芝居裏では花代が十本一円六十五銭で飛田や松島より一時間で十五銭高いだけが、三十本以上がたいたいの単位になっていたため、どうしてモノシシ（十円札）一枚にきかないと遊びに行きにくかった。一月五、六十円あれば親子三人なんとか食べたころの十円である。前述の飛田や松島ではタツタ八十銭で遊んだやつもいた。しかも彼女たちは「籠の鳥」で一步も外出させ自由にならなかった。（赤線追放は当然のことである）そこへいくと芝居裏の女たちは外出も自由で血色もよく健康的？だった。

★さて、いよいよ本題にはいる。ぼくはここで花柳芳兵衛氏の小春団治に間違われ、日ごろモテないのに、その夜にかぎって大モテだった。敵娼（あいかた

ーこれも古い）にいくと弁解しても小春団治だとぶってきかないのである。ぼく自身小春団治の高座すら見ていないのに……。

★それから数日後、偶然に楽天地の高座で彼を見た。楽天地というのは火事で有名になった千日デパートの前々身で、前身は大阪歌舞伎座だった。この楽天地はマンモス娯楽場で芝居あり、歌劇あり、演芸場あり、遊技場まであって、田中絹代の少女時代は琵琶少女歌劇の一員であり、江利チエミの母、谷崎敬子も歌ったり踊ったりしていた。その演芸場で小春団治を見たのである。なんとなく小柄なところなど客席の後方から見ていると似ているようにも思えた。

★素人名人会の審査員だった氏を見ると、その風格からして僕などとは全然似ていなかった。（不二田一三夫）

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警 察 庁 ・ 警 視 庁
全 国 府 県 警 察
大 阪 府 警 察 本 部
講 道 館 ・ 御 指 定

製造・販売 サントリー株式会社

(サントリー謹製)

上等の夜を約束する
上等のワイン。

金曜日はワインを買う日。



サントリーシャドリアン

〈赤・白〉1,500円 ●中瓶800円

昭和四十九年一月二十五日
昭和四十九年一月二十五日
創刊大正十三年通巻五九九号

川柳塔

十月号

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



定価 二百五十円 (送料十六円)